
穢れなき獣の涙

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穢れなき獣の涙

【Nコード】

N4810U

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*そこにあるはずの記憶——それを何度、思い起こしただろうか。それでも記憶は酷く曖昧で黒くふちどられた影は私に己のなんたるかを語ってはくれない。

小説サイト「野いちご」(Berry's Cafe)、「魔法のiらんど」にも投稿させていただいている作品です。

* 始まりの予兆

魔法は人々の生活に深く根付き、武器を携えた放浪者たちが大陸を渡る。モンスターの息づかいに恐怖を覚え、商人たちは旅団を組んで街から街に移動する。

錬金術師はこの世の理を追及し、魔法使いたちの唱える呪文に力が宿っていく。

魔法世界——エテルシヤス。

海に浮かぶ4つの大陸と大小の島々、そして空を浮遊する大地が織りなす世界。

「……」

薄汚れた象牙色のマントを羽織る青年は眼前の草原を眺める。

その帯黄緑色の瞳は美しく、整った顔立ちに見合うシルヴァプロンドの髪は肩まで乱雑に伸ばされているが少しの風でもなびくほどの細やかさを備えていた。

男がいるのはエナスケア大陸。4つの大陸の右下に位置する大地だ。ここは人間とエルフが主に住んでいる大陸である。

空を飛ぶモンスターも多く生息し、それを足代わりに他の大陸に向かう者も多い。

「シレア！」

男の声が青年を呼ぶ。振り返ると斧を背中に装備しているガタイの良い青年が馬に乗ってこちらを見ていた。

「エンドルフか」

「奇遇だな」

エンドルフと呼ばれた男はシレアの乗り物を一瞥し空を見上げる。彼の乗っている動物は馬ではない。

カルクカンと呼ばれる爬虫類に似た風貌をしている生物だ。鱗のない肌は赤や黄色や緑と色とりどりである。

青年の乗っているカルクカンは青みがかった緑といった処か。顔つきは亀のようで前足は無い。しかしその強靱な後ろ足は大地をしっかりと掴み、速さは馬に引けを取らない。

「近頃よ……どうにも変な空気があるんだが」

装備しているブレスト・プレート（胸当て鎧）を着直すように少し持ち上げエンドルフは苦い表情で問いかけた。

「ああ。大気が妙だ」

鎧類は一切、身につけていないシレアも眉をひそめる。

「お前はどこに行くんだ？」

「ん……まだ決めていない」

エンドルフはそれに小さく笑って短い赤茶けた髪をかき上げた。

濃いグレーの目は細く、一重まぶたに似合わぬ豪快な口元。エンドルフは戦斧を繰る放浪者だ。年は26歳。

シレアは細身で、流れ戦士と呼ぶにはいささか軽装過ぎるその腰に提げられているのは長さ70？ほどの剣。

魔法のまったく使えないエンドルフと違い、シレアはかなり高度な魔法も使いこなす。年は24歳。エンドルフと比べるとかなり小柄な方だろう。

「まあ気をつけろよ」

エンドルフは旅を再開するため軽く手を挙げて馬を進めた。青年も手を挙げて応えその後ろ姿を見送る。

「……」

シレアはしばらく草原と空を見渡したあと街に向かった。

* 2人の少女

数日ほどかけ目の前に見えた街に入る。活気溢れるこの街はエナスケア大陸では5番目ほどの大きな街だ。

カルクカンから降りて石畳の道を歩く。彼を視界に捉えた女たちは声もなくただ呆然と過ぎていく姿を見つめた。

過ぎ去ると溜息を漏らし潤んだ瞳で宙を仰ぐ。

「今の見た？」

「みたみた。凄い美人」

「そこは美形っていうのよ」

「どっちでもいいじゃない」

2人の少女が互いに顔を見合わせる。シレアを見つけて何やら話し合っているようだ。

共に10代前半だと思われる2人の少女。緩やかにカーブしたブルンドの髪に大きく可愛い青い瞳。

赤いリボンを後ろにくくっている少女の名はソシエ。可愛いクマのネックレスをしている少女の名はセシエ。この2人は同じ顔の双子なのだ。

いつも2人でコソコソと話してはイタズラをして街の人々を困らせる。しかしその可愛さについ許してしまう。

「どうする？」

「決まってるじゃない」

訊いた妹のセシエに勝ち気な笑顔を見せソシエは駆け出した。

「さて、どうするか……」

宿を探して歩きながら並んだ建物を見渡す。人が多く行き交う道は思うようには進めない。

少し苛つき気味だったシレアは、ガシッ！と腰の革袋に伸ばされた手首を掴んだ。

「いつ!？」

「! 子ども？」

それほど生活には苦勞していないと思われる服装をしている少女が手首を捕まれ驚いてシレアを見上げた。

「なんの真似だ？」

「いただ……きつ!？」

ガシツ! と反対側の手で革袋に伸ばされた新たな手首を掴む。視線を移し確認した切れ長の瞳が丸くなる。

「同じ顔？」

2人の少女は手首を捕まれ戸惑いの表情を浮かべた。

「双子か」

呆れたように小さく溜息を吐く。

「ち……」

「ん？」

「痴漢ー! キヤー!」

ギョツとして思わず手を離してしまった。

「あ、待て……」

さして起伏のない声で呼び止めるが少女たちは颯爽さっそうと走り去る。

「……」

追いかけるのも面倒だ。とまた宿を探すためカルクカンの手綱を持ち歩き出した。

すると――

「ちよつと! なんて追いかけてこないのよ!」

「そうよ!」

「……」

後ろから双子が腰に手を当てフン! と鼻を鳴らしてシレアに声を張り上げた。

「追いかけてほしかったのか」

「当り前でしょ!」

赤いリボンの少女が応えるがこちらにしてみれば意味が解らない。

「もういいわ！ こっち」

「？ おい……」

クマのネックレスを着けた少女が彼の手を掴みグイと促した。

「……」

仕方なく彼女たちの思うままに従うと、案内されたのは宿屋の看板。

「宿の人間か」

「うん、そう」

「ここがあたしたちのおうち」

「泊まって欲しいなら素直にそう言えばよかるう」

青年は再び溜息を吐き出す。

「それじゃあつまんないじゃん」

「そうそう」

リボンの言葉にクマは頷く。

「つまらないのはお前たちであって私はそうではない」

「いいからいいから」とリボン。

「入って入って。あ、馬は裏の厩うしやにつないでね」

*薄幸の女

「……」

シレアは宿屋の前で建物を眺める。

ここは街の端、ひとけもほとんどなく花街からも遠い場所だ。確かに宿屋らしい看板がかかっている。

「カナン〱お客さんつれてきたよー!」

「カナンのお嬢さん候補だよ」

「……嬢?」

「ちよつと! 何言ってるのよ!」

双子の声に女性が慌てて出てきた。

怒ったように拳を上げて双子に目を吊り上げると、双子はシレアの背中に回りグイと押し出す。

「! やめろ」

やはり起伏のない声で双子たちを一瞥し、前にいる女性に顔を向けた。

「!??」

カナンと呼ばれた20代に入ったばかりと思われる女性は、その整った顔に息を呑んだ。

「すまんが一夜の宿を頼みたい」

「……」

見下ろされる瞳に言葉を無くす。

さらりと流れるシルヴァブロンドに、まるで金緑石きんりょくせきのような瞳。

こんな人が本当に存在するのか……カナンは時間も忘れて見とれた。

「……聞こえたか?」

「ハッ!? はいっ、ごめんなさいっ」

少し頬を染めて中に促した。綺麗な栗毛を後ろで1つに束ね青いスカートに白いエプロン。目の色は双子と同じ空の色。なんとなく顔つきが似ている、姉妹か。

「あつ座ってください。宿帳持ってきますから！」
パタパタパタ……と駆けていく。

「……？」

シレアは怪訝な表情を浮かべ部屋の中を見回す。入り口からいきなり食堂なのは小さな宿にはよくある。

2階が寢床なのだろう。しかし彼が不思議に思っていたのはそんな処ではない。

「この宿は彼女だけで経営しているのか？」
「……」

シレアの問いかけにふさぎ込む双子。

「両親は去年、死にました……」

カナンが声を低くして応えた。

「お前1人で切り盛りしているのか」

「あたしたちもお手伝いしてるもん！」

「これがお手伝いだと言いたいのか」

「ちゃんとお客さんつれてきた」

しれつと言いつつ。シレアは呆れて溜息を吐き出した。

「父さんたちがいた頃は常連さんとかいたんですけど……」

カナンは苦笑いを浮かべる。

「あ、ごめんなさい」

気を取り直すように微笑みを見せ宿帳を手渡す。それにシレアは呆れたように目を据わらせた。

「放浪者アウトローに宿帳を渡す者があるか」

「え？」

シレアはそのまま羽ペンを手に名前を書き記す。

「文字の読み書きが出来ない者もいる」

「あ！？」

羽ペンと宿帳を返しながら発した。

「わたしったら……」

カナンは今までの失敗を思い出したのだろう。顔が青ざめていく。

全ての者が文字を学ぶとは限らない。家庭の事情や住んでいる場所、貧しい者には学びの機会はなかなか得られないのだ。

アウトロー
放浪者と呼ばれる者たちは文字の書けない者も少なくはない。必然的に文字を学ぶ職業なら別だが、戦士はその腕だけで大陸を渡り歩く。

「失敗は次に活かせばよい」

「……はい」

しょんぼりして宿帳を受け取る。

「落ち込んでいるところ悪いのだがね」

「はい？」

「何か焦がしているぞ」

「！？ お鍋！」

キヤー！ カナンは慌てて奥に引つ込んだ。

「今夜の晩ご飯だいしょうぶかなあ……」

双子は互いに顔を見合わせて心配そうにこぼした。

シレアは双子に部屋を案内され、チップとして銅貨を1枚ずつ渡す。

「……」

「何を見ている」

ドアの隙間からじっと見つめる双子にシレアは眉間にしわを寄せた。

「……ホントに男かと思って」

「なんなら見るか？」

シレアはグイと服を掴んだ。

「キヤー！ ヘンタイ！」

双子はキヤツキヤと階下に駆け下りていった。

シレアは女と見まごう容姿という訳ではないが若干、中性的な面持ちである。

細身の体にはちゃんと筋肉もついているし、どちらかと言えばガツシリしている方だろう。外見だけ見れば儚くもか弱く感じられる

のかもしれない。

しかし彼は流れ戦士だ。そこらのいかつい男よりも強いハズ。ゆつくりと服を着替え、食堂に降りていく。

「……？」

まだ焦げた臭いが充満しているようでシレアは眉をひそめた。

食堂に降りていくと、数人のアウトローたちの姿があった。あのだちに連れてこられた人たちだろうか？

男女の2人組みに男3人組み、そしてハーブを持った若い男性がそれぞれにテーブルに着いていた。

入ってきたシレアを一瞥し視線を戻す。

男女の2人組みは男の方は斧を持ち女の方は細身の剣を装備していた。男3人組みは1人は魔法使い（ウィザード）だろうか、灰色のローブを着ている。

あとの2人は戦士と盗賊^{シフ}だろう。均衡の取れたパーティだと言える。

そしてハーブを手になっている青年。彼は吟遊詩人^{バード}だ。その美しい調べでモンスターを魅了し戦う者――時には昔から受け継がれている伝説を語る事もある。街での仕事はもっぱら酒場で歌う事だ。

そんな彼らが興味を持つのは当然、細身の流れ戦士。視線が時折シレアを刺す。当の本人は慣れたようにその視線を意に介さない。

この場において彼の力を見限る者はいない。それぞれに場数を踏み経験を重ねてきた者たちなのだろう。

相手への過小評価は避けるべきだという教訓が身に染みているとみえる。

「……」

出てきた夜食に一同は眉をひそめた。

「焦がしている……」

「焦がしているな……」

と互いに目で意思を交わしていた。

「カナンゝニガいよう」

「ごつごめんなさい……焦がしちゃって」

カナンは青ざめた顔で両手を胸の前で組んで客たちに謝る。

「食べられない訳ではない」

シレアはそう言い放ち口に運んでいった。それを見た他の客も従うように口に運ぶ。

「次に活かせばよいのだ」

「はっ、はい……」

「そうよ。気にしないで」

「気にしてもらわにゃ次に活かせんだろ」

「！ それもそうだ」

食堂は和やかな雰囲気変わった。

「では何か歌いましょうか。これはサービスです」

吟遊詩人はハープを手に柔らかに微笑む。

「そいつは有り難い」

ガタイの良い戦士が笑って応えた。

ハープの美しい音色が部屋を満たし、青年の少し高めの声がメロディに乘せられ古の伝説が紡がれていった。

*我が友

「あ、あの。謝罪といつては何ですが、今日仕入れた果物をごちそうしますわ」

カナンはそう言つて大きめの木の器に入れられた黄色い果物をテーブルに乗せた。

甘酸っぱい果物は苦さの残る口の中を洗い流すように心まで満たすように顔をほころばせる。

「じゃあごちそうさん」

「はい。おやすみなさい」

部屋に戻つていく客に応えながらテーブルの上をカナンは掃除していく。

「！」

その前にシレアの手が伸ばされた。手の上にあるのは銅貨5枚。

「代金だ」

「え？」

カナンは首をかしげる。宿代は前金ですでもらっているのに？

「客は少ないのだろう。無理をするものではない」

「！？」

カナンは驚いて見上げた。

「でっ、でも……っ」

「これは私からのチップだ」

そう言つて静かに銅貨をテーブルに置き階段に向かった。

次の朝——厩うまじの横にある水場で顔を洗うシレアの背後で双子がニタニタとしている。

「朝っぱらから何をニヤけている」

「シレアってキレイ」とセシエ。

「綺麗」

朝日に照らされたシレアのシルヴァブロンドを指さして双子はコロコロと笑った。

素知らぬ顔でシレアは厩に向かい、カルクカンの首を優しくさする。

「それ、キレイな色のおうまさんね」

セシエはクマのネックレスをいじりながら青みがかった緑のカルクカンに近寄る。牧草を手にしてカルクカンの口に持っていくシレアは不思議そうに見つめる少女に小さく笑った。

前足の無い姿だが、遠い昔には鳥だった事を示す翼の名残りが両脇にちょこんと着いていた。

「クルルウ……」

カルクカンは嬉しそうに喉を鳴らしてシレアに顔をすり寄せる。

「お名前はなんていうの？」

首を傾け赤いリボン^{かたむ}を揺らしてソシエが問いかけた。

「ソーズワースという」

「カッコイイ名前ね」

「こいつを捕まえるのに苦労した」

「！ 聞きたい！」

「あたしも！」

双子にせがまれてシレアは少し苦笑いを浮かべたが、側にあった丸太に腰を落としゆっくりと口を開いた。

「そうだな…… あれはまだ肌寒い季節だったと思う」

カルクカンが主に生息しているのはコルレアス大陸で人間が住んでいるエナスケア大陸の隣に位置している。

大陸の間には大きな海が横切っていて、その海流はとても激しく安易に渡れるものでもなかった。

大陸間での行き来は空か魔法移動が安全である。

とはいえ、空を飛ぶモンスターは調教が必要なため安くはなく魔

法移動もこちらと向こうに魔法円が必要でありウィザードの手助けが不可欠だ。

大抵の者は危険な海路を選択するしかない。

シレアは馬ではなくカルクカンを手に入れる事を考えていたが、どうしたものかと思案した。

しかしエナスケア大陸にも唯一カルクカンが生息している場所があった。

大陸の西——リンドブルム山脈の向こうに広がっている草原、そこにわずかながらカルクカンの生息が確認されている。

遙か昔に運良くコルレアス大陸から渡ってきたものだろう。と推測されているが、その特性は若干だがコルレアスとは異なっていた。その皮膚はコルレアス大陸のそれよりも硬く脚力も強い。やや小柄である事を除けばこれほど旅の助けになる乗り物はなかった。

問題は……リンドブルム山脈を越えられるかどうかだ。切り立った岩山は足を踏み入れる者たちを容赦なく谷底に突き落とす。

山の頂上には常に冷たい雪が旅人を凍えさせようと待ちかまえていた。危険な動物やモンスターも多く棲み、誰しもが安直に山を越えようなどとは思わない。

「……」

そんな山の入り口に17歳になったシレアは立っていた。

そびえ立つ岩山を見上げ一度、深く息を吸い込んで足を進める。

山を越えるという事で服はいつもより厚着だ。バックパックに保存食を詰め込んで気を張った。

彼の住んでいる集落はこの山脈にほど近い西の辺境にある。よってここにたどり着くのは比較的、楽だった。

屈強な戦士や魔法に長けた魔術師^{ウィザード}でさえほとんど踏み入れないというリンドブルム山脈——行きは辛いが帰りはカルクカンがいる。

向こうで捕まえて乗れる程度まで調教しカルクカンと共に戻ろうというのだ。寒さにも強いといわれるカルクカンに期待を膨らませる。

子どもの頃に見たカルクカンが忘れられず、彼は「旅をするならこいつだ！」と決めていた。

彼の育った村は17歳になると成人として認められる。外の世界に思いをはせ旅に出る者も少なくはなかった。

シレアもその中の1人——彼は成人の義を終えんとすぐさま旅の準備を始めた。その旅の友としてまずはカルクカンを手に入れるため、仲間たちや長老の制止も聞かずここまで来たのだ。

悲しむ女は多かったが彼にはさしたる関心もなくさらりと流し村をあとにした……そんな事を考えながら山を登る。まだ中腹にもさしかからない岩山はその牙を剥かず旅人を受け入れる。

しかし、かなり登った処で違和感が襲った。

「!？」

低くくぐもったうなり声が耳に微かに届く。

この声は……

「ギャラルか!？」

向かってくる影をとっさに避けた。

「グワオ！」

その灰色の毛を逆立たせ、猛獣はシレアを威嚇する。虎を思わせる風貌だが2対の牙は大きく長い。

「……っ」

腰の剣を抜き視線を離さずに構えた。

いかにも頑丈そうな毛皮を見つめる。その見た目から動きは素早いと察する事が出来る。魔法は難しい……強力な魔法ほど集中に時間を要するのだ。

「仕方ない……」

言って口の中で何かを唱え始めた。

*優しき眼差し

当然のごとく相手はそれを待つ訳もなくシレアに鋭い爪と牙を向けて突進してくる。

「っ！」

言い終わってすぐ、シレアの頭ほどもある炎が彼の眼前に出現しギャラルに向かって飛んでいった。

「！？」

飛んでくる火弾を避けたギャラルの前には――

「！！ ガアア！」

剣を構えていたシレアに牙を剥いたギャラルだが、彼はその切っ先を猛獣の口に突き立てた。

「ゴアアッー！」

「くっ……」

暴れるギャラルを制してさらに剣を押し込む。ギャラルはビクビクと痙攣し動かなくなった。

「はあ……」

猛獣から剣を抜き疲れたように少しうなだれ、気を取り直して鞘に収めた。

「いきなりこれでは先が思い遣られる」

溜息1つ。そのあと貴重な衣服と食料に心の中で感謝をしギャラルの毛皮を剥ぎ肉をまとめていく。

そしてやや傾斜のきつくなった山道を再び登り始めた。中腹までたどり着くと寒さが増してくる。しかしそのまま登っていく。

ここで服を重ねたりすると返って汗をかき体力を消耗させてしまう。限界になるまで重ね着は避ける事にした。

次第に風が吹きすさび雪がちらついてくる。用意していた毛皮の首巻きを取り出し首にまいて先を進む。

危険な相手には出会わなかったが、辺りが暗くなってきた。比較的、風の弱い岩陰を探しマントにくるまる。

「……………」
小さくなって目を閉じた。

「——！」
まぶしさに目を覚ます。吹雪は去り青空が迎えていた。道と呼べるようなものは無く地図と星の輝きを頼りに再び足を踏み出す。そんな事を10日ほど続けて体力も限界に近かった。

「！」
12日目——眼前に広がったのは岩肌や積雪ではなくまぶしいほどの緑……

「……頂上か」
ホッとして、今まさに向かおうとしている緑の地を見下ろした。はやる気持ちを抑えて山を降りていく。

こちら側は少し地形が緩やかなのか、10日とかからずにふもとに到着した。

「……………」
しかし彼の体力もすでに限界……意識が少しずつ遠のいてそのまま倒れ込んだ。

「ん……………」
何かに舐められている感触が頬に感じられる。ゆっくりと目を開き震える腕で上半身を持ち上げた。

「ケエエー！」
「！？」

シレアは目を丸くしてへたり込む。カルクカンの群が自分を取り囲んでいたのだ。

「これは……………」
カルクカンは馬と同様に人によく慣れると聞いてはいたが、まさ

かここまでとは……その光景にしばらく言葉を無くした。

すらりと伸びた尾はしなやかなムチのように動き、艶を帯びた肌は太陽に照らされて色とりどりの光を放つ。

「……」

夢の中にいるような感覚に目を細めた。

そうして彼はしばらく体力を回復させるためにカルクカンを見ながら体を安め、3日後に意を決する。

体力はまだ完全に回復している訳ではないが、まず捕まえて調教しながらでいい。バックパックからロープを取り出し先端を輪にする。

それを適当に草の中に投げてその先を手にとって地面に腰を落とし空を見上げた。

いくら人なつこいとはいえ、捕まえようとする相手に近づくほど馬鹿でもない。

かと思っていれば――

「!？」

シレアはひよこひよこ近づいてくる1頭のカルクカンに目を丸くした。

「えーと……？」

あまりにも警戒心のなさに頭をポリポリとかく。

「!」

そういえば馬には運命の相手がいると聞いた事がある。

人と馬の間にある絆は必ず互いを引き合わせる……それがカルクカンにもあるというのだろうか？

そのカルクカンを見つめた。青みがかった緑の体と黄色い瞳はシレアを見下ろす。

「……私と来るか？」

「ククルウ！」

乗りこなすのにはやはり調教が必要で体力の回復も兼ねてシレアは数日、草原で暮らした。

他のカルクカンとも仲良くなり、彼らが自分を守るために回りにいた事も充分に理解出来た。

彼らには「弱っている相手を守る」という習性があつたのだ。ソーズワースと名付けたカルクカンに鞍くらを乗せ飛び乗る。

「クルル……」

別れの時が近づいているのを感じているのか、彼らは静かにシレアとソーズワースを見つめた。

名残惜しそうに揃って小さく鳴き、それは輪唱のごとくやがて大きくなり草原に響き渡る。

それを背にシレアはソーズワースと共に立ちはだかる山脈に再び足を向けた。

「——という訳だ」

「……」

少女たちはぽかんと口を大きく開けてシレアとカルクカンを交互に見やる。

「このお馬さん優しいんだ」

ソシエは少し怖々（こわごわ）とソーズワースを見上げた。

「大きな爬虫類に思われがちだがそうではない」

静かに立ち上がりソーズワースの首を優しくさする。

「クルル……」

気持ちよさそうに目を細める姿にセシエとソシエは微笑んだ。

「乗ってみるかね？」

「えっ!？」

「だ、だいじょうぶ……?」

シレアは柔らかに笑って頷く。

「!」

裏口から水を汲みに出たカナンは、はしゃぐ妹たちに柔らかに微笑んだ。

「ありがとうございます」

「ん？」

朝食を終えたシレアにカナンはゆっくりと近づき紅茶の入ったコップをテーブルに置いた。

「あの子たちのあんな顔、久しぶりに見たの」

「！ ああ……」

「父さんたちが死んでから、あの子たちふさぎ込んでしまつて、言いながら向かいの席に腰掛ける。」

「宿を継いだわたしのために必死で笑つて一生懸命、元気なフリをして」

「あの子たちはあの子たちで考えているのではないかね？」

「え？」

「お前が考えているほど彼女たちは弱くはないよ」

両親の死をしっかりと受け止め、生きている今を強く感じている。

「もう少しあの子たちに頼つてもいいのではないか？」

シレアの言葉にカナンはしばらく呆然とした。

「……そんな事、考えてもみなかった」

いつも無理矢理お客さんを連れてきて謝るのに大変だったけど、そのおかげでお客が1人もいない日はなかった。

大変だったけど忙しさと泣いてる暇なんかなかった……

「そか……わたしのために」

「お前は1人ではないよ」

柔らかな微笑みで発する。その瞳に吸い込まれそうになって頬を少し赤らめた。

「じゃあこれから4人でどう？」

「そうそう」

「……」

テーブルの下からニョキツと頭が2つ飛び出す。シレアは双子の顔を交互に見て無言で視線を外した。

「あ、今スルーしたでしょ」

「カナンのことキライ？」

「ちょ……ちょっと2人とも……」

当惑するカナンを一瞥し、2人に顔を近づける。

「私は流れ戦士だ。1つ処には留まれぬ」

言ったあとゆっくり立ち上がり階段に向かった。

* 這い寄る影

「……っ」

つられて立ち上がったカナンはその後ろ姿を見つめてキュツと唇を噛む。

なんとなく解ってはいたのだ。彼は自分に好意を持っている訳ではないと……少しは期待しなかったと言えば嘘になる。

しかし——彼の瞳には誰も映っていない。

『人を愛せない』

彼の瞳はそう語っていた。誰をも魅了する容姿を持つ者が誰も愛する事が出来ないとは、なんたる皮肉だろう。

「……」

ベッドに寝ころび窓を叩く風に目を細める。そして強く目を閉じ暗闇の記憶をたぐる。

ぼやけた影が自分と呼ぶ——それは男かも女かも解らない。

街で拾われる前の記憶はいつもこうだ。拾われたのはおそらく3歳の時だったろう。西の辺境にある村の長老が遠出をした際に幼いシレアを見つけて村に連れ帰った。

問いかけても自分の名前と歳しか覚えておらず、しばらく街に滞在したがシレアを見て駆け寄る者はいなかった。

感情をあまり示さない少年を長老は少し怪訝に感じたが彼は正しく成長した。長老はそう信じている。

いくら記憶をたぐっても見いだせないもどかしさ。今ではもうどうでもいい……過去の記憶があろうと無かるうと、前に進むしかないのなら気にしていても仕方がない。

元来、引きずらない性格の彼は心に留めつつもそうして生きてきたのだ。

「！」

そんな事をうつらうつらと考えていたシレアだったが、不穏な気配に脇に置いてある剣に手を伸ばす。

「……」

上半身を起き上げて、少しずつ形を成す黒い霧を見つめた。

それは次第に人の形を作り出し、目の部分に現れた2つの黄色い光がシレアを見ているようだった。

「辺境の戦士よ……」

黒い影は低く、くぐもった声で発した。

「私に何用か」

「……」

黒い影はシレアを見定めるようにしばらく沈黙して男か女かも解らない声が響く。

「お前にはこの先、試練が待ちかまえている」

「！」

影は右手で青年を差しさらに続けた。

「旅はお前をさらなる深淵へと誘うであろう。その美しい姿が醜く歪むさまはさぞ見ものだろう」

それだけ言々と黒い影は何事も無かったようにかき消える。

「……」

気配が消えた事を確認し、剣を持つ手をゆるめた。

「どういう手合いか……」

溜息を吐きナイトテーブルに乗せているピッチャーから真水をグラスに注いで一気に飲み干す。

敵意は感じられなかったが、あまり良い言葉ではない。

「旅は……か」

つまり「旅を続けるなら心せよ」という事だろうか。

「……」

剣を握り目を伏せた。

旅を続けていれば数々の苦難が襲うのは当然だ。今更、あんな言葉で自分の旅を終らせるつもりはない。

この瞬間、死ぬ事になっても悔いなどあるものか。

どちらかと言えばあの影の言葉は願ったりだ。このまま平穏な旅などつまらない事このうえもない。

そう納得付けて剣から手を離す。

「とりあえず……」

つぶやいて顔を上げドアに向かった。

「昼飯だ」

「え？ もう発たれるのですか？」

カナンはシレアから聞いた言葉に少し寂しげな表情を浮かべた。

相手は流れ戦士。長居などしないと解ってはいても、彼が去ってしまう事に寂しさを覚える。

シレアは食べ終わって飲み物の入ったコップを傾けた。

「本当ならば朝に発つ予定だった」

「！」

そう言われるとなんだかホツとしてしまうカナンだが、これから発つ事には変わりはない。

シレアはカナンを一瞥し階段を上っていった。

「……っ」

引き留めたい。でも、それはだめなのだと自分に言い聞かせる。

彼を止める事はあたしには出来ない。カナンはキュッ……と手を握りしめた。

部屋に戻ったシレアは準備を始める。

先ほどの影の言葉が気にならないと言えば嘘になるが、確かめたい衝動にもかられている。

「世話になった」

「お気を付けて……」

宿の入り口で交わす言葉。

いつもなら元気に笑って言えるのに……カナンは何か得体の知れない不安に唇を噛みしめた。

「……」

カルクカンの手綱を持つて歩いていったシレアは空を仰ぐ。

人々は気づいているだろうか……

胸の奥をじわじわと締め付けてくるこの重たい気配に――

それともシレアだけが気づいているのだろうか？ 足下から徐々に這い上がってくるどす黒い意思は全てを飲み込もうとしている。

「……っ」

眉をひそめ再び足を進めた。

街を出て北に向かう。

2日ほど行った処には深い森があつたが、確かそこには良からぬ魔物が棲んでいると聞いた。姿は誰も確認した事が無いという。謎に包まれた魔物……そう思うとおのずと気持ちちはやる。

彼は魔法戦士と呼ばれる類に入りそのための軽装でもあるのだ。

魔法を放つにはある程度の身軽さが必要とされる。

それでもシレアの装備は軽すぎるといってもいいだろう。

己の身体能力を最大限に活かした装備とも言えるが……素早い動きと繊細な剣さばきは流れるように敵を切り裂き、剣舞は見事なまでに美しく見る者を魅了する。

その容姿に「専属で雇いたい」と持ちかける領主が今までに何人もいたが彼はそれをことごとく断ってきた。

「クルルル……」

ソーズワースの甘える声に首をさする。

*進む道

森に向かって足を進めると小さな湖が視界に映った。まだ明るい
がすぐにでも陽が傾くだろう。

「今日はここまでか」

ぼそりとつぶやきカルクカンから降りる。朽ちた木を集め火をお
こした。

「……」

澄んだ湖を見つめる。

「魚の1匹くらいいるかな？」

そう言って服を脱ぐ。短剣を口にくわえて体を沈めていった。湖
の中心まで泳ぐと、何度か深く呼吸して一気に吸い込み水中へ――

「！」

湖の中は予想よりも視界が鮮明で底に沈んでいる倒木からは魚影
が多く見られた。一度、水面に出て再び水中に潜る。

「！？」

そんな彼の背後に巨大な影。

慌てずに振り返ると、そこには巨体をくねらせた魚がシレアをじ
っと見つめていた。

「……」

シレアの背丈ほどもあるだろうか。赤い目をギョロつかせている。
確かにデカイ魚だが彼を獲物と思うほどの大きさではない。と思
ったのだが、巨大魚はその口をゆっくりと大きく広げていった。

口の中にはびっしりと牙が生えている。

「……」

彼はその光景をじつくりと眺めて、バクン！ と噛みつく瞬間に
巨大魚の牙をかわして短剣をその眉間に突き立てた。

「！？」

巨大魚は激しく抵抗するが柄を強く握りしめてそれに耐え、激し

く動く巨大魚が水面に向かって素早く泳いでいくと大きな音を立ててジャンプした。

それを何度か繰り返してようやく力尽きたのだろう、ゆっくりとした動きになり生命活動を停止した。

それを陸に引き上げ、軽く服を着たあと魚を丁寧にさばいていく。鱗は陽に照らすと七色に輝いた。それを洗ってまとめていく。この魚の鱗は薬になるため薬剤師や錬金術師などに売れるのだ。

「さすがに多すぎる……」

今日と明日の分を別にして、残りは干物にでもしようと丁度良い大きさに切り分けたが……カルクカンには草食性のため魚は食べない。干せば今よりは小さくなるものの、しばらくは干物で暮らすことになると思うと溜息が漏れる。マントを地面に敷いてその上に切り身を並べていく。

それを済ませると今度はさらに枯れ木を集めて火を少し大きくし、切り身を串に刺して火の側に突き立てた。

しばらくすると魚の焼けた匂いが漂ってくる。火に向けていた面をくると返して干している切り身も裏返す。

傾きかけた太陽を見つめて、たき火のそばに腰掛け食事を始めた。

「……」

真夜中——もう一枚のマントを敷いて寝ころび両手を頭の後ろで組んで星空を眺めた。パチパチとオレンジに光るたき火の炎がほのかに暖かい。

「！」

するとまた黒い影が現れた。

「旅はお前の行く先に暗き影を落とす」

「お前は私に何を望む」

影は何も応えない。

「引き返すなら今だ……今ならまだ引き返せる」

ゆらゆらと揺れる影は闇夜に溶け込む訳でもなくむしろ鮮明な黒

を映し出す。敵意は一切、感じない。しかし、影の向こうにある存在感ひしひしと伝わってくる。

「！」
しばらくすると影は現れた時と同じように音もなく消えた。

朝——干していた魚を片付けて旅支度を始める。

明日の朝か昼には森にたどり着くだろう。荷物をカルクカンに乗せ背中にまたがった。

そうして北に進んでいき、夜になると薪を集めて火をおこす。シレアは魚の干物を食べながら小さく溜息を漏らした。

「そろそろ獣の肉が欲しくなってきた……」
欲張った訳でもないのにデカイ獲物になってしまった事に少し後悔する。さすがに干物が沢山ある中で他の獲物を捕る訳にはいかな

い。
そんな事を考えていた時——遠くから何かがゆっくり歩いてくる音がした。

「……」
側に置いてある剣に手が伸びる。現れたのは黄金色に輝く瞳のヒョウ。口に何かくわえている。

「？」
逃げるでも警戒するでもなくシレアに目を合わせて近づいてきた。

「……」
その獣は口にくわえていたものを離すと暗闇に消えていく。

「……？」
眉をひそめて近寄るとそこにあつたのは死んだウサギだった。

「またか……」
時折、不思議に思う事がある……まるで供物を捧げるかのように

獣たちが私に獲物を置いていく。
そんなとき自分が何者なのかを考える。

記憶の一片でも現れてはくれないだろうかと旅に出ても、これか

ら先に役立つ知識は得られるが過去については何一つたりとて暗い影を照らし出してはくれない。

はがゆさと己の正体の不気味さが時折、心を支配する。それでも陽は昇り時は流れていく。止まってはもられない。

そんな事で考え込むのはまっぴらだ。私の意思は誰のものでもないのだから。

私には――前に進む事のみが許されている。

*暗き森の鼓動

明け方近くに出発し、昼少し前に森に到着した。

「……」

目の前にうつそうと生い茂る草木を見つめる。森の奥に目をこらすと、思っていた以上に深い森だという事が窺えた。

この森の名は『魔物の棲む森』。

そのままの名前で拍子抜けしそうだが、それが返ってこの森の不気味さを引き立たせていた。他に形容できる言葉が無かったのだらう。

ソーズワースの首をさすり森に足を踏み入れた……

「……」

歪んだ木々とごつごつとせり出した木の根に足を捕られないように慎重にカルクカンの歩を進める。

ソーズワースはその強靱な2本の脚でしっかりと大地を踏みしめて恐れる風でもなくシレアを乗せて踏み出していった。

枝を広げる木々の隙間から漏れる陽の光はあたかも得体の知れない存在を映し出すように差し、鳥の声は凶暴な獣の気配に怯えるように甲高く鳴り響く。

青年は気配を探りながら奥へと進んでいった。

「本当に広い森だ」

陽はすでに傾きかけているというのに、一向に先が見えない。

「今日はここで野宿か」

言いもってカルクカンから降りた。

「……」

瞳がさらに細くなる。

彼は気づいていた……森に入ってから、肌にまとわりつくような視線に射抜かれている事に。

いつものようにたき火をして干物を焼く。食べ終えて両腕を頭の後ろに回し寝転がった。

「……」
相変わらずどこからか注がれる視線——敵意は感じないがあまり気持ちの良いものではない。

視線は遠い。おそらく別の場所から意識を飛ばしてこちらを窺っているのだろう。

「まあいいさ」

小さく溜息を吐き目を閉じた。

魔物の棲む森とは噂されるが、実際には澄んだ大気が流れる場所だと感じた。森に入ってからまだ一度もモンスターに遭遇していない。

「ここは聖なる領域なのか」

木々の間からこぼれ落ちる太陽の光に目を細めてつぶやく。

そんな聖地が何故、魔物の棲む森などと言われたのだろうか？

不思議に思いながらも足を進める。

しばらく歩くと少し拓けた場所に出た。

「！」

そこには一軒の古びた家がぼつんと身を潜めるように建てられていてシレアは怪訝な表情を浮かべた。

警戒しながら建物に近づく。古い家だが人が住んでいた形跡がある。

「……」

ゆっくり扉を開いて足を踏み入れた。

一枚板のテーブルは薄汚れているがホコリは落ちていない。暖炉には火は灯されておらず冷えてはいるが長らく使われていない訳ではなさそうだ。

「？」

首をかしげたシレアの背後に気配——

「……っ」

早口で聞き取れない言葉が耳に届き彼はとつさに剣を抜きながらつぶやいた。振り返ると同時にオレンジの塊かたまりが視界に入り暖かい感覚が右肩にした瞬間、それは弾かれるように飛び退いた。

「どわあっ!？」

弾かれた塊は何かにつかりそれは叫びを上げて小さな爆発を広げ消える。

散った炎と煙が消えた先には、地面につつぶしうめき声をか細く上げている人間がいた。

「く……くくっ」

その人物は苦しそうに起き上がると数回、深呼吸してシレアに向き直った。

「なんてことをするんじゃ! ファイアボール程度の魔法だったから良かったが、むやみに魔法反射マジックリフレクションなどかけるものではない!」

怒鳴りながらシレアに指を差す50代ほどの男性は左手にトネリコの杖を持って振り回す。

「……」

シレアはその男を少し見下ろしてしばらく沈黙していたが……

「初めに魔法を撃ってきたのは誰だ」

「ム……」

銀色の瞳を泳がせてちよつと戸惑った仕草を見せたあと「おぬしの力を試したのじゃ!」男は鼻を鳴らしてビシッ! と言った。
た。

「だったら返されても文句は言えんよな」

「ぐっ……」

声を詰まらせた男から視線を外し再び室内を見回す。

「ここはあんたの家か」

「そうじゃ」

返事を聞いて向き直ったその瞳は少し陰しかった。

「何故あんな忠告をした」

「!? …… なんの事じゃ」

「気づかないとも思っているのか？ あんたの気配はあの影と同じだ」

じつと見下ろす青年から視線を泳がせる。風貌は老齡な男性らしい優雅にも見えるものだが、ずっと森の深くに住んでいた事が窺える薄汚れた服装と白髪混じりの栗毛にシレアは眉をひそめた。

「！」

「！ どうしたのじゃ」

シレアは目の前にあるただならぬ気配に男を守るように左手を横に突き出した。

「家の中に入っている」

未だ見えない気配にシレアは声を低くして発し剣に手をかける。

「グルル……」

低いうなり声が徐々に近づいてきて茂みの中から現れたのは……

「!? バシラオ？ 馬鹿な！」

目の前に現れた獣に男は声を張り上げた。

バシラオと呼ばれた3体の獣は獲物を前にして唾液をしたたらせる。熊を思わせる顔つきに虎のような文様を体に浮かび上がらせて前足で威嚇した。

「ここは聖なる領域なのじゃぞ！ バシラオなどが踏み入れられる場所ではない！」

「しかし実際に目の前にいる」

冷静に応えて剣を抜く。

「ソーズワース」

「クルル」

「！」

カルクカンがシレアの言葉を理解したように男の隣に立った。

「なんじゃ？ 乗れというのか」

シレアが「そうだ」と目で示したが男はカルクカンを見上げて目の前の獣に目を移し、青年の隣に並んだ。

「！」

「ここで逃げては我ら一族の名がすたる」
杖を構えた男に小さく笑った。

*導く者

3匹と2人は沈黙の中、睨み合う……バシラオの属性は邪悪だ。イヴァイル
他の者とは決して相容れないモンスターで、目の前にある生き物を
その爪と牙でむさばり食う。

シレアはその巨体を見上げ口の中で何かを唱えた。

「！」

それを聞いた男も同じように唱え始める。

「わしの名はユラウス・マノアルス。この森の守人もりびとじゃ」

最後の詠唱を切り男は名乗った。それに一瞥し同時に最後の詠唱
を唱え終る。

刹那――獣たちの周りに稲妻が幾重も走り攻撃した。

「グフオオ!？」

チェインライトニングを浴びたバシラオたちは電撃による轟音と
痺れに動きを止める。

「……っ」

シレアがすかさず刃を走らせると同時にユラウスがファイアボ―
ルを幾つも放ち、たまらなくなったバシラオたちは一目散に逃げてい
った。

静まりかえった森に再び鳥たちのさえずりが響き渡る。互いに見
合い安堵の溜息を漏らした。

落ち着いた処でシレアは話題を戻す。

「説明はあるんだろうな」

「……ぬしの姿を見た」

「！」

ユラウスが重い口を開く。

「邪悪な炎に身を焼かれるおぬしの姿が見えたのだ」
目を伏せさらに続けた。

「強大な力の前に、おぬしとその仲間たちは水面に浮かぶ木の葉のごとき儚さでことごとく倒されるのだ」

「！ 仲間？」

「仲間かどうかは定かではなかったが……久しく見なかった道の先が鮮明に描かれたのだ」

「すでに滅びたと思っていた」

「！？」

シレアは話題を変えるようにつぶやいた。

「古の種族は予言の力を持っていると聞いていたが」

占いとは異なる未来予知の能力^{ちから}。それは鮮明で曖昧な境界線の上に敷かれている。抽象的に展開される映像は時に、見た者を悩ませた。

予言の力は争いにも用いられ……いつしか古の種族は姿を隠し世界から消えていったのだ。

「人間と似た種族だと聞いていたが確かに見分けがつかん」

「何故わしがそうだと？」

ユラウスは試すように鼻を鳴らしてシレアを見つめる。

「同じ魔法だったが詠唱の言葉が少し違っていた」

「！」

古い言葉が入り交じっていた。と応えた青年にユラウスは感心するように小さく溜息を吐く。

「わしは2300歳になる。細かい年は忘れた」

この森にたどり着きこの森で最期を迎える覚悟でいた。

「わしが住み着いた事で聖なる森はいつしか魔物の森と名付けられてしまった」

「身を隠していたせいだろう」

「もう誰の目にも触れないと誓っていたのじゃ」

それなのに……長らく見なかった未来がユラウスを悩ませた。いくらそしらぬ振りをして突然に脳裏に映される映像は続き、ユラウスは仕方なく影を飛ばし忠告した。

「理解したのなら引き返すが良い。お前にあるのは血の最期だけじゃ」

「……」

シレアは見据えるユラウスの瞳を見つめる。

そしてフ……と笑うとカルクカンの手綱を持ち歩き始めた。

「！？どこに行く。そっちは北じゃ」

「忠告は聞いた。あとは私の自由だ」

「馬鹿な！わしを古の種族だと知って尚、その予言を無視するといつか！？」

「無視などしない。聞き入れて進むのだ」

ユラウスは青年の言葉に啞然とした。

「なんたる無謀な！」

青年はぴたりと立ち止まり、吐き捨てるように発したユラウスに向き直る。

「私には無くして惜しいものなど無い。己が進めぬのならば何の意味があるのか」

感情を殺し、生きる事の辛さに比べればこの先に待ち受ける苦難にさえも立ち向かおう。まだ見ぬものならば変えられるかもしれない。

「……っ」

静かに語ったシレアに目を丸くする。そして目を伏せ薄く笑った。
「クク……こんな若造に諭されるとはな」

目を閉じて何かを決意したように瞼を上げると晴れやかな顔で発する。

「ぬしと共に邪悪な炎に焼かれる仲間の中にわしの姿もあった」
「！」

「わしはそれが恐ろしくておぬしの足を止めようとしたのも理由の1つだ。情けないではないか……誇り高き古の種族ともあろう者が」
「逃げる事が悪しきものではない」

「どのみちぬしと旅をせずとも命を狙われる」

「！」

「何故なら、おぬしの助けとなる仲間を探すのがわしの役目だからじゃ」

「……それを阻止したい奴がいるという事か」

青年の問いかけに無言で頷く。

「おぬしが運命の仲間たちと出会う事で、その者には何らかの不都合があるのやもしれぬ」

「その仲間とやらは解らないのか」

「まだはつきりとは見えぬ……おそらく旅をする事で鮮明になってゆくだろう」

小さく首を振りながら応えた。

「聖なる地にバシラオが踏み込んだ事で異変がさらに増大している事が解った。しばし待て、わしも旅の準備をする」

「……」

そう言つて家の中に入っていくユラウスの背中を見つめる。

自分が何者なのかを探す旅が思わぬ方向に進んでいる……これは運命なのか？ 逆らえないほどの大きな流れに捕まったらしい。

彼は苦い表情を浮かべ木々の間から覗く空を見上げた。

*滅びと繁栄

「次はどこに行くつもりじゃ」

ユラウスは青毛あおけの馬にまたがり青年に訊ねる。

「……」

見事な黒い馬を見つめて北に目を移した。

「このまま北へ」

「エルフの領域か」

ユラウスと同じく古くからの種族で他種との交流は薄いが敵対的な種族ではない。

「エルフは恵まれた種族だ」

「！」

ふとユラウスが馬を進めながらつぶやく。

「美しい容姿に長けた技術。そして長き命を持つ。我らより遅く誕生した種族じゃが、なんと羨ましい事か」

多少の皮肉を込めた物言いに青年は小さく笑う。

「確かに容姿においてはエルフは最も美しいとされているな。だがお前の種族ほど長寿ではないだろう」

「しかし緩やかな滅びが訪れる」

「！」

目を伏せて発した声に少しの哀しみが見て取れた。

「我々が本当に羨ましいのは人間じゃ」

強い欲望を持つ人間は広く繁栄を続けている。

「我らは普通に暮らしていれば死が訪れる事は無い。それが感情の起伏を緩やかにする……それは種族の繁栄を妨げるものに他ならないのじゃ」

子孫を残す事にあまり執着する事がない。

緩やかな滅び——かつて大地を支配していたユラウスの種族は今
はもう彼一人となった。

「千年ほど前には仲間を探す旅に出た事もあった」

しかし、それは己の孤独を確かめるだけに過ぎなかった。

「……」

その言葉にシレアは空を仰いだ。

*雨の出会い

「しかし、エルフのどの集落に向かうつもりなのじゃ」

「森の民には一度、会った事がある。草原の民に会おうと思う」

「！ 草原に住むエルフか…… 森の民より好戦的だと聞くが」

「会ってみたい事には解らん」

そうして2人はさらに北に馬を進ませる。

草原に点在する白い岩がまるで墓標のように暗い空の下に映えていた。

「……雨が降る」

「そのようじゃな」

2人は急ぐように馬を進ませ雑木林のような小さな森に踏み入った。

「ぽつぽつしてきた。止むまでここで足止めじゃな」

ユラウスの言葉に森の中を見回し、さして密集もしていない木々の根元に腰を落ち着ける。

草原のエルフの集落まではすぐそこだ。慌てる事もないだろうと2人は朽ち木を拾い集め火を灯した。

静かな森にパチパチとたき火の音が響く。

「……？」

シレアは何かを感じて腰の剣に手を当てた。

「！」

ユラウスは彼の険しい表情に周りを警戒する。

「……」

森特有の空気の中に漂う気配……シレアはそれを読むように目をギョロつかせ剣を持つ手に力を込めた。

突然——真上から何かが勢いよく飛び降りてきたかと思うと一気に周りを囲まれる。立ち上がった時にはすでにいくつもの武器が2人に突きつけられていた。

その姿はスラリと細く耳は皆、一様に尖っていた。エルフだ。手に手に細身の剣や弓を持ちいつでも攻撃出来るように構えている。

「この地に何用か人間！」

声の主がエルフたちの背後から現れた。

コーン・シルク（薄い黄色）の髪は長く艶やかに背中まで伸びていて薄紫の瞳は2人を交互に捉える。

「草原の民か」

さして臆する事もなく剣から手を外しシレアはその男を見据えた。
「いかにも。我は草原を統べる者マシアスの子にしてアザレアの息子アレサ」

堂々とした物言いに己の種族に誇りを持っている事が窺える。

「貴殿たちはいかようでこの地に足を踏み入れた。ここは我らが領域と知つての事か」

「そうだ。私はお前たちに会いに来た」

少しのためらいもなく言い切った青年にアレサは眉をひそめた。

「貴殿の名は」

「シレア」

「わしはユラウスじゃ」

エルフの青年はユラウスと名乗った男に睨みを利かせる。人間では無いと悟ったのか怪訝な表情を浮かべた。

そして青年に目を移し、彼の言葉の意味を問いかける。

「何故、我らに会いに来た」

「訊きたい事があるのだ」

揺るぎのない金緑石きんりょくせきの瞳は心の奥を覗かせてはくれない。アレサは2人をまた交互に見つめ、決心したように小さく溜息を吐くと口を開いた。

「いいだろう。雨もあがった。我らの集落に案内する」

「すまない」

2人は荷物を抱え馬の手綱に手をかけた。

森から出ると雨の匂いが草原を覆い、肌寒い風が頬をなでていく。どこからともなく聞こえる水の音が雨上がりである事を知らせ湿った空気にシレアは空を仰いだ。

「貴殿はこの者だ」

アレサはいぶかしげにシレアを見つめ問いかける。人間も住む場所によって特徴が出るものだが、彼にはそれが見受けられずにいた。「西の辺境に住む民だ」

「！ 西の辺境？ 流れ戦士を多く生む民か」

「拾い子を育てる民とも聞く」

「私がそうだよ」

ユラウスの言葉にシレアは笑って応える。それに驚いた2人だが、それでもアレサには疑問が残った。

例え拾い子だとしても民の特徴はあるはずだ。

しかし彼の存在は不思議だった——どの民の特徴も有しているような、どの民とも違うような……

「まあいい」

わたしには関係の無い事だ。アレサは思って2人を案内していく。

「！」

しばらく行くと草原に広い窪地が眼前に見えてきた。

「？ 集落は無いのか」

ユラウスがいぶかしげにつぶやくと、窪地にある白い岩のあちこちから人が出てくるではないか。

「彼らは窪地の洞窟に住むと聞いた」

シレアは発して、その不思議な光景を眺めた。

まるで幻影のようにゆらりと動く影……若草色の布地で統一された服を着た人々は皆それぞれに整った顔立ちでさりと流れる髪は曇った空の下でさえ輝きを放っているように見える。

髪や瞳の色はバラバラだが、その顔立ちには草原の民の統一感があつた。

「馬はこちらに」

アレサが言っていると他のエルフが手綱を渡せと手を差し出す。近くでシレアたちを見つめるエルフの中には、カルクカンが珍しいのか引かれていくソーズワースの姿を目で追う者もいた。

そうして他の入り口とは異なった造形の施された洞窟の前で立ち止まる。

「武器は外してもらおう」

また別のエルフが手を出す。2人は見合い小さく溜息を吐き出して剣を渡した。

ユラウスは「杖も渡せ」と催促されたがそれを断ると無理に奪われる事もなくそのまま洞窟の中に促される。

白い岩壁の洞窟内はひんやりと涼しく、一定間隔でロウソクが灯されていた。

その壁には所々に彩色がされていて冷たいイメージは無く、美しい種族に見合った図柄に溜息が漏れるほどだ。

* 長き種族の血

洞窟の中はいくつも枝分かれしていてエルフの文字でそこがどこに向かう道なのかが示されている。

草原のエルフは主に穀物を加工して食す。人間のクッキーに似た食べ物だが、味は様々だ。もちろん野菜も肉も食べられない訳ではない。

「！」

一番奥まで連れられると、そこには冷たい床に厚手のマットを敷いた上に腰掛けている老齡の男性が優雅に腰を落としていた。

艶やかなベージュの長い髭ひげと髪を流し上品にシレアたちを見つめる。草原の民の長老だろうか、その姿には威厳と尊大さが見て取れた。

長い者では1万年を生きるとされるエルフはある年を境なかいに齡よわいを重ねることにその輝きを増していく。

この長老はユラウスと同じくらいの年齡なのかもしれない。

「これは珍しい。古の種族とは」

嫌味のない物言いにユラウスも小さく腰を曲げて会釈した。

「長老のキケト様だ」

アレサが紹介するとキケトは上品に頭を下げた挨拶する。シレアも応えるように頭を下げた。

そうして腰掛けるように促され、キケトの前にしゃがみ込む。

少し緊張気味のユラウスと違って青年はまるで知人の家にでも来たかのように片膝を立ててキケトを見据えた。

「随分と肝の据わったお方だ」

そう言って笑みをこぼし、話を切り出した。

「して、訊きたい事があるとか」

キケトの言葉にシレアの表情が少し険しくなる。

「私について、何か知っている事はないか」

「！ 貴殿について？ それはどついう事だろうか」

「私は己が何者なのかを知らない」

「！」

そこにいた者はシレアの告白に小さく驚く。

「精神的な意味ではない。あなたは己がエルフだと知っているように確かに私は人間なのだろう。だがその何たるかを私は知らない」

「我がエルフの草原の民である事を知っているという事か」

青年は無言で頷く。

「フム……」

小さく唸って髭をさすりシレアの瞳をじつと見つめた。

しばらくそうしていたが、キケトはふいに溜息を吐いて首を振った。

「やはり解らないか」

「すまぬ。おぬしの奥に入り込めぬ」

シレアは解っていた事のように小さく息を吐き出し微笑んだ。

「己を探しておるのか」

「目的があつた方が旅はより楽しめる」

「そうであるならば良い」

深く悩んでいる素振りのないシレアに発して部屋の入り口付近にいたエルフに手を軽く挙げ何かを示した。

「今日はごゆるりとしていかれよ。歓迎いたす」

「かたじけない」

「有り難く受けよう」

飲み物が振る舞われ、白い皿に乗せられた料理が中心に並べられる。会話している間に作ったのだろう、どれも人間の口に合いそうな料理ばかりだ。

種族は違えど食べ物はずして変わらない。ユラウスも美味しく味わっていた。

「ユラウス殿」

「！ なんですかな？」

「他の者は……」

「生憎と……」

途中で言葉を切ったキケトから視線を外しユラウスは目を伏せる。

「……そうか」

返ってくる言葉を察していたキケトはそれ以上、何も言わなかった。

「種はいつか淘汰される。それが自然の摂理というものよ」

薄く笑って応えるが納得のいくような表情は浮かべていない。どんなに納得がいなくても、目の前に横たわる事実から目を背けてはいけないのだ。

存在している者は生きていかなければならない——過去に囚われていては己自身の存在の意味すらなくなってしまうのだから。

「前に進む力があるのなら希望はある。客人の部屋を用意した、ゆつくり眠るとよからう」

「それは有り難い。何せ野宿というものには辛うてな」
皮肉交じりに腰を叩きシレアを一瞥する。

「！ よくも言う」

青年は呆れたようにつぶやいた。

*襲来

会食も終わりシレアは松明の灯たいまつされた野外で遠い暗闇を見つめる。
「！」

見渡すとアレサの後ろ姿に目が留まった。そちらに近づき隣に立つ。

「！」

「当番か」

「うむ」

静かに発した青年の横顔を一瞥し応えた。

しばらく夜の声を2人は聞き、おもむろにアレサが口を開く。

「己を知らないというのは不安か？」

「不安は無い。ただ知りたいだけだ」

彼に目を向けず暗闇を見つめて発する。

空に浮かぶ月は細く、草原を柔らかく微かな明かりで照らしていた。

「！」

「？ どうした」

突然、腰の剣に手を添えて辺りを窺うように険しい表情を見せたシレアに眉をひそめる。

「……他の者を起こした方がよさそうだ」

「！ 何？」

突然——シレアに飛びかかる影！

「ギャフ!？」

シレアは剣を抜きその影を叩き斬った。

「!？ ゴブリン？」

小柄な影が叫びを上げて地面に転がるとそれを合図に邪悪な気配が辺りを支配した。

「！ これは……」

「囲まれている」

毛髪はなく土色の肌と尖った耳、そしてぎよろついた赤い目は燃えさかる炎のように異様なほど大きい。

アレサは慌ててバチを手に取り近くのドラを強く叩いた。空気を震わせるほどの重たい音は窪地にこだまして異常が起きた事を伝える。

「なんだ？」

「どうした」

音に起きたエルフたちが口々に出てくる。

「武器を取れ！ 敵だ」

アレサの声と地面に転がっているゴブリンの死体にざわめきたち、エルフたちは一斉に戦闘体勢に入った。

敵対的な赤い輝きが闇の中からこちらを見つめる。

その数は10……否、20かそれ以上だ。人間よりもひとまわりほどの体格で強さもさほどではないが集まれば脅威となる。

「客人は中に」

「心配はない」

静かに応えて戦う気にいるシレアに驚く。エルフもゴブリンも夜目が利くため昼間と何ら変わりなく動く事が出来るが人間はそうはいかない。

それを知ったうえで戦おうというシレアに半ば呆れた。

「死んでも知らんぞ！」

アレサは声を張り上げて剣を振り上げる。開始された戦いに夜の静けさはかき消され怒号が響き渡った。

「なんじゃ！？ 一体……」

「ユラウス！ ライトの魔法を！」

「お……おお！」

突然の声に驚いたが状況を把握して明かりの魔法を唱えた。

「！？ ギャア」

「ギャーン！？」

唱え終わったユラウスが頭上にまばゆい光の球を形作るとゴブリンたちは皆、苦しみ始める。夜行性の彼らは太陽の光を嫌うため、それに似たライトの魔法は効果的だ。

いくら数が多くてもこれではたまらないようでゴブリンたちは一斉に退却した。

それを確認しアレサは深い溜息を漏らして剣を鞘に収める。

「一体これはどういう事だ」

アレサは眉をひそめて転がるゴブリンの死体を眺めた。

「近くに棲み家でもあるのかね？」

「まさか！」

ユラウスの問いかけにアレサは「とんでもない！」とでも言う風に肩をすくめる。ゴブリンは人間やエルフ、ドワーフにはことのほか敵対的だ。

2人はあてがわれた部屋に戻りベッドに腰掛けて話し合う。

「どう思う」

切り出した青年を一瞥し、ユラウスは小さく溜息を漏らした。

「相手の方がわしよりも早く先を見ている……」

苦々しく発した。

「やはりそうか」

シレアも眉をひそめる。

「このまま去る訳にはいかな」

「うむ……とにかく仲間を見つけて説明だけはしなければならん」

同行するかどうかは本人の自由だが、その者が集落にいる事で攻撃され続けるだろう。もっとも、集落を離れた処でその者は死ぬまで狙われる可能性がある。

「とにかく体を休めよう」

「そうじゃな」

2人はベッドに潜り込み、久しぶりの柔らかな感触に浸りながら意識を遠ざけた。

* 誇り

次の朝、シレアが目を覚ますとユラウスはすでに起きていてベッドに腰掛けて昨夜の続きを思案していた。

その時――

「――」

ユラウスが前方の空間にまばたきもせず無表情にぴくりとも動かなくなつた。

何かを見ている……？ 何の反応もなくなつた彼をしばらく見つめていたが、どうにも暇で立ち上がる。

「さて」

「――」

顔でも洗いに外に出ようかとした青年の背中を呼び止める。振り返つて見下ろしたユラウスの表情は少し複雑な感情を表していた。

「解つたのか」

「……」

ゆつくりとシレアを見上げて口を開いた。

「――」

シレアが外に出ると昨夜倒したゴブリンの死体を集めて燃している最中だつた。鼻を突く異臭に顔をしかめる。

ひとまず顔を洗い、山積みの燃える死体を眺めているアレサの隣に立った。

「昨日はすまなかつた。まさか客人が来ている時にこんな事になるとは……」

「いや」

気にしていないという風に声を上げ、同じように死体を見つめる。「なんという臭いじゃ。鼻が曲がりそうだわい」

眉間に深いしわを刻みながらユラウスが歩いてきた。

「アレサ」

「！」

振り返ると青年のエルフ2人がニヤけた顔をこちらに向けていた。
「昨日はちゃんと見えてたか？」

皮肉交じりの声が飛んでシレアとユラウスは眉をひそめる。

「わたしの母の血をバカにするのなら相手になるが」

「！？」

淡々とした言葉に2人のエルフは小さく舌打ちして離れていった。
そうして黙って見ているシレアたちを一瞥し薄く笑う。

「おぬし……」

「母は人間だ」

「ハーフエルフか」

己の種族を誇りに思うエルフの中にあつて、他種族との間に生まれた子は時として辛い仕打ちを受ける事がある。

互いの血に心がせめぎ合い葛藤を繰り返し堕ちていく者も少なくはなかった。

「わたしは父の血と母の血に誇りを持っている。恥ずべきものなどない」

強い言葉はその表情からも見て取れる。まっすぐに前を見つめ、揺るぎない意志は彼を大きく見せた。

エルフと人間の混血であるアレサの戦士としての能力は誰にも引けを取らない。だからこそ彼はこの集落で戦士たちを束ねる隊長たり得るのだ。

「ならば私と来ないか」

「！？」

突然の言葉にアレサは目を丸くした。

「大気が揺らいでいる事に気がついていいるだろう」

「……うむ」

「我らはその中に飛び込む者じゃ」

「！？」

2人の言葉に理解出来なかったが、その真剣な眼差しに話を聞く気になる。

「彼の予言では私がそれに深く関わっているらしい」

「先ほど見えたヴィジョンはおぬしの姿じゃった。やはり冷たい炎に吞まれて苦しむ姿であつたが……」

「見えない敵は私の仲間と成りうる者をことごとく滅しようとしている」

「！」

シレアの言葉が昨日のゴブリ襲来と結びつく。

「あれはわたしを狙ったものだといふのか」

「未だ見えない脅威はわしの少し先を読んでおる」

「……」

アレサは目を伏せて思案した。

彼らの言葉は信じられるのだろうか……しかし、昨夜のゴブリンには何か巨大な意志があつたように感じた。

邪悪な存在は容易に支配されてしまう。昨日のゴブリンたちがその見えない脅威とやらに操られていたとしても不思議ではない。

「しばらく考えさせてくれ」

「時間は無いぞ」

シレアは発して客間に足を向けた。

「……」

2人の後ろ姿を見つめ彼は少し苦い表情を浮かべる。

その夜——アレサは長老の部屋を訪れた。

いつもの表情で訪れたアレサだったが長老には何かを考えている事が解つたらしい、敷物に腰掛けた彼に静かに問いかける。

「どうした」

「キケト様……実は」

神妙な面持ちで語り始めるアレサをじっと見つめて話に聞き入った。

静かな部屋に少しひんやりとした空気は彼の心情を物語るかのよう
に容赦なく肌を刺す。

さほど長くない語りに目を閉じていたキケトは語り終わった事を
確認して目を開く。そうしてアレサの心を探るように彼の瞳を見つ
めたあと、ゆっくりとだが力強い言葉を発した。

「おまえの目は彼らの背中を見ている」

「！」

「彼らについて行きたいのだろう」

「……」

アレサは目を伏せた。

保守的なエルフの中にあってアレサの父は珍しく放浪者^{アウトロー}だった。

旅先で人間の母と出会い恋に落ちる。

エルフの集落に戻れば酷い視線を浴びるかもしれない……そう語
ったが母は「それでも構わない」と2人でここに戻ってきた。

すでにお腹の中にいたアレサを氣遣つての事だった。

人間の中でハーフエルフとして生きるよりも、まだ温厚なエルフ
の中で生きた方が産まれてくる子どものためだと感じたのだろう。

母は冷たい視線を浴びながらもエルフの中で暮らしアレサに愛情
を注ぎ込んだ。母の受けている仕打ちに気づかないアレサでは無か
ったが、母はその仕打ちにもめげず笑顔を振りまく。

「私がここでは異質なのよ。だから、誰も憎んではだめ。私はあな
たも彼もエルフたちも愛しているわ」

そう言つて幼少のアレサを抱きしめた。

誰も責めたくて責めている訳じゃない……自分たちとは違うもの
を恐れる事は当り前のことなのだ。

もちろんそれが良い訳じゃない。それでも彼らを憎む事は自身を
不幸にするだけ……己の幸せは他人を憎む事では成し得ることなど
出来ないのだから。

母は皆に冷たくされていた訳じゃない。彼女の心の強さを認め仲
間たちと同じように接していた者も少なからず存在した。

母が寿命を迎えた時、父は再び旅に出るとアレサに語り「いつか迎えに来る」と言い残してから10年後――父は帰らぬ人となった。モンスターに襲われていた人間を救うため己の身を挺してモンスターと相打ちとなる。その礼と彼の持ち物を届けるため集落に訪れた人間は、アレサの前にへたり込み何度も同じ言葉を発し続けた。

「すまない……我々のために君の父親が……」

詰まらせる声にアレサはキュツと唇を噛み、彼らに視線を合わせるようにしゃがみ込む。

「いいえ、父はあなた方を救ったのです。わたしはそんな父を誇りに思います」

気丈な言葉にエルフたちも喉を詰まらせる。

それからアレサは必死で己を鍛え、いつしか誰も彼を「半端モノ」とは呼ばなくなった。しかしその心の奥には父の生きてきた道を辿る自分がいたのだろう、シレアの言葉に胸が躍った。

自分が彼とどう関係し、見えない脅威と対峙してどう苦しむのかは解らない……先の見えない事に不安は感じていてもシレアの言葉に心が強く惹かれたのは事実だ。

「……」

じつと答えを待つキケトに目を合わせ決意したように頷いて発した。

*目的地

「！」

発つ準備をして客間から出てきたシレアとユラウスの目に、馬の手綱を持ったアレサが映る。

シレアたちに向き直りゆつくりと口を開いた。

「わたしも同行させてもらえないか」

それに無言で2人は頷き白に近い月毛つきげの馬を見上げた。その見事な毛づやに彼の旅立ちを祝い心配する仲間たちの意識を感じ取る。

「！」

シレアはキケトの姿に少し驚いた。彼を外で見た事がなかったため、今見ている風景と彼の姿に多少の違和感を覚える。

「シレア殿。アレサの事をよろしく頼む」

「ああ」

そして彼だけに聞こえるように小さくつぶやく。

「アレサは我が孫のように接してきた者だが、旅先で何が起こるかは解らぬ」

もし万が一の事があつたとしても……おまえたちを責めたりはせぬ。

「！」

旅をするという事がいかに危険なのかを知っているのだろう。かつてのアレサの父を思えば、それも当然なのかもしれない。

「私ではどうにもならない力の前で気安く安心しろとは言えん」

そう返したシレアに小さく首を縦に振った。

「……」

アレサは無言で集落と仲間たちを見回し、振り切るように一度強く目を閉じて馬にまたがった。

それを確認しユラウスとシレアも自分の馬にまたがる。アレサは引き留める自身の心に喝を入れ馬の腹を蹴った。

徐々に遠ざかる風景に喉を詰まらせる。

何故だろう——今までいた場所なのにそれが酷く遠く感じた。今、こうして旅に出る事が自分にとってはとても自然で決して成り行きだけの旅立ちではないのだと実感させる。

引きずる感情はすぐに消え、先の見えない道程に心は微かに高鳴った。

「で、次はどこに行くのじゃ」

ユラウスの声に我に返りアレサは青年に目を移す。

「そうだな」

カルクカンの背中で空を見上げ2人に顔を向けた。

「北の大陸に渡りたい」

「！ ギユネシア大陸にか」

人間とエルフが主に住んでいるエナスケア大陸の上にあるギユネシア大陸。そこに住む種族は人間やエルフたちとは少し違った姿形をしている。

「あの地に行ってもおぬしが何者が知っている者がいるとは思えぬが……」

「可能性が無いとも言い切れん」

「どうやって行くつもりなんじゃ」

「うむ、海路、空路、転送とあるが」

「……」

シレアは少し悩んでソーズワースの首をさすり応えた。

「海路だ」

「！ 本気か？ わしは反対じゃ」

「では、あなたはどの道がよろしいと？」

「決まっておる。転送魔法じゃ」

鼻を鳴らして発したユラウスに2人は顔を見合わせる。

トランスファー

「Transferの魔法を使って、どこの街に飛ぶつもりだ」

「！……」

シレアの言葉に男は一瞬、顔を引きつらせた。

転送の魔法は一度その場所を訪れていないと成功しない。その場所にある魔法円を視界でまず捉え確認する事で成立する魔法なのだ。「500年ほど前にギユネシア大陸には渡った事がある！ 地図を見せろ」

ユラウスの言葉に2人は馬から降りて持っている荷物の中から地図を取り出す。それを交互に見やりユラウスは眉をひそめた。

「……わしの知っている街がない」

「500年も前の記憶なら同じ場所にあるとは限らないぞ」

「もつともお前が知っていたとしても我々はその魔法を使えん」

「……」

この魔法で運べるのは詠唱者のみである。もちろん馬に乗っていれば馬ごと転送されるが、服や手を握っていても成人を同時に転送させる事は出来ない。

街を知らないシレアとアレサがギユネシアの街に飛ぶ事は不可能なのだ。この場合はユラウスも知った街が無い^{ため}転送魔法は使えない。

「空路か海路……どちらにするか」

「私は海路を考えている」

シレアの言葉に2人は少し苦い顔をした。

「何故、海路なんじゃ。空路の方が安心じゃろう」

空路はワイバーンというドラゴンの眷属を調教した調教師^{テイマー}に頼み運んでもらう。

他にも空を飛ぶモンスターは存在するが、大陸から大陸への移動にはそれなりの体力が必要だ。

ドラゴンの眷属ではあるが知能は低く腕は無い。人間でも飼いはらせるモンスターである。

とはいえドラゴンにも強さや姿はそれぞれで、人間が飼いはらせるものから神に近い存在まで様々である。

ワイバーンで移動する場合、馬などは網やカゴに入れ後ろ足で掴んで飛ぶ。

「特に意味は無いよ。ただ海路を選びただけだ」

「荒れ狂う海に飛び込むか」

ユラウスは半ば呆れて肩をすくめた。

大陸と大陸の間を流れる海流はすさまじく、経験を積んだ船乗りでさえ航海の度に命を賭けた旅路となる。

「とにかく、まずは空路を検討しようではないか」

そう言ってユラウスはシレアの持つ地図の港町を指し示した。

エナスケア大陸の北には大きな港町が2つある。1つは大陸を渡る船のあるザラルカともう1つはその東に位置する、飛竜を使った渡りを生業としている港町ソルデラウス。

「……」

シレアは2人の顔を交互に見つめ「仕方がない」という風に溜息を吐いてユラウスの案に賛成した。

*警告

ソルデラウスまでは彼らの場所からなら6日ほどで到着する。

「何がそんなに不満なのじゃ」

2人の後ろからゆっくりとした足取りで続くシレアに眉をひそめた。

「不満など無い」

「ではどうしてそんな難しい顔をしている」

訊ねられて青年は2人を一瞥し空を仰いだ。

「……大気が少しざわついている」

「！」

それを聞いて2人も空を見上げた。

「嫌な予感がする」

つぶやいたシレアを見やり、一同はソルデラウスに向けて足を進めた。

「飛べない……？」

街に到着したユラウスたちは、その足で「渡し屋」の厩舎きゆうしやに訪れたのだがテイマーたちが神妙な面持ちで話し合っていた。

「ああ、昨日から大気がかなり乱れていてね。これではいくらワイバーンといえども人や馬を連れて飛ぶのは無理だ」

赤と青の羽根飾りを左耳に付けた男が腕を組んで応える。

「……」

シレアたちは顔を見合わせた。

「これはシレアの予感が的中したな」

「わしらの行く手を阻むという事は、ギユネシア大陸に何かあるという事かの」

唸るユラウスを一瞥しアレサがぼつりとつぶやく。

「敵の方がまだ一歩進んでいる」

「ム……悪かったの」

「で、どうするのだね」

睨み合っていた2人に青年はしれつと問いかけた。

「……」

腰を折られた感じになったアレサとユラウスは小さく溜息を吐き
気分を替えるためやや背中を伸ばす。

「海路しかなさそうじゃな」

「うむ」

「今日はここで一泊し、明日の朝に出発だ」

シレアたちはそのまま馬を厩舎に預け、宿を探して歩き出した。

宿が決まり食事を済ませた3人は部屋に戻ってベッドに腰掛け話
し合う。

「敵の姿は見えないのか？」

「うむ……大きな炎をまとった影としか」

アレサの問いかけにユラウスは神妙に応えた。

「旅を進めればそのうち見えてくるだろう」

しれつと言い放つ青年に2人は半ばあつけにとられる。

「呑気だのう……ぬしが最も関わっているというのに」

「実感が湧かない事に不安がっても仕方がない」

肩をすくめて小さく笑った。

それもそうかとユラウスとアレサは納得する。自分たちだって関
わっている事は確かだが正直、実感は湧かない。

「敵の姿がチラとでも見えれば意識も変わるかもしれないが……」

「そうなると実感どころかまともに対峙する事になるではないか」

困惑して見合う2人にシレアはクスツと笑みをこぼして発する。

「今、深刻に考えても仕方がない」

そう言われてしまっではどうしようもない。

「とにかく明日はザラルカに向かおう」

ユラウスが発し、一同は眠りに就いた。

深夜——眠るシレアの夢に黒い影が現れる。

「貴様など我の前では吹きすさぶ風にまかれる木の葉に等しい」

大きな影は発して小さなシレアに手を伸ばす。

「ならば何故、私の行く手を遮ろうとする」

少しも臆さず応える青年にその手を止めた。

「お前が何者で何を成そうとしているのかすら解らぬ私を何故、恐れる」

「恐れてなどおらぬ」

「それは本心か」

声を張り上げたたん、黒い影は渦を巻いてシレアの周りに轟音と共に舞い消えていく。

「——っ」

息苦しさに跳ね起きる。

「……今のは」

額の汗を拭い暗闇を見回した。

どうやら敵はその力を徐々に強めているようだ。じわりじわりとシレアたちに迫ってきていた。

しかしそれが何なのか……未だ姿は見えない。

早朝、シレアたちは旅の準備を済ませ厩舎に向かった。

「！ そんな夢を？」

「ああ」

歩きながら昨夜の夢を語る。

「それでよくも平然としてられるものじゃない」

言われて小さく微笑んだ。

一同は厩舎に到着すると馬を受け取り隣の港町ザラルカに向けその背にまたがった。空は暗くどんよりと灰色の雲が敷き詰められ、これからの旅を象徴するように心に重くのしかかってくる。

隣町までは1日もかからない。

昼過ぎには港町を臭わせる船の絵が描かれたレリーフを掲げた煉瓦造りの塀に囲まれた町の門に到着した。

活気ある声が町の外にいても耳に届いてくる。

3人はそのまま港に向かった。大勢の人間を初めて見るアレサの表情は驚きと戸惑いが混じり合った複雑なもので、シレアは苦笑いを浮かべる。

港に着いてシレアたちは馬から降り、作業している男たちの1人に視線を合わせた。軽く手を挙げると40代ほどのその男が近づいてくる。

「何か用かい？」

薄汚れた厚手の服と太い腕にがっしりとした体格。海の男ならではの風貌を確認し青年は口を開いた。

「大陸を渡りたい。予定はあるか」

その問いかけに男はピクリと反応し、シレアを下から上まで見定めるように眺めたあと発する。

「3日後に出航予定だ。3人か？」

「ああ」

「いくら払う」

「金貨10枚」

青年の言葉に男は鼻を鳴らした。

「3人でか？ 随分と値切るな」

「我々は魔法を使える。航海には助けになると思うがね」

「！」

男の片眉がピクリと吊りあがった。

海でモンスターと出くわした時、海中での戦闘はこちらが圧倒的に不利となる。そこで接近戦の必要が無い魔法は重宝するという訳だ。

「……」

男はあごをさすり3人を見つめる。しばらく考えてニヤリと笑った。

「よし、いいだろう。俺はネドガレル、ネドリーでいい。そんであ
れが俺の船シャーク・スピナー号だ」

白い歯を見せて硬い黒髪に浅黒い肌と赤茶色の瞳をしたネドリー
が背後にある大きな船を親指で差した。

「よろしく頼む」

よくある定番の名称に薄笑いを返したシレアは、差し出された手
に握手を交わす。

* 真紅のドレス

出航までの3日間、シレアたちは町に滞在する事になった。

「金はあるのかの？」

ユラウスが訊ねる。

「……」

シレアは2人を見やり沈黙した。

森の中で暮らしていたユラウスと人間社会に初めて遭遇したアレサ……この2人が金を持っているとは思えない。

いや、エルフは人間とも交流が多少あるため金というものには馴染みはあるが……稼ぐ必要の無い彼が金を持っているとは思えない。

シレア1人なら3日ほどの滞在費くらい余裕で持っている。しかしあと二人分となると……青年は頭を抱えた。

船代は残しておかねばならないのだ。どうしたもんかと腕を組んで唸る。

「ちよいと兄さん。お困りのようで」

「！」

突然、後ろから声を掛けられて振り返るとそこにいたのは小柄な男。少し出っ張った前歯と猫背で30代後半だと見受けられた。

「なに用か」

アレサが無表情で問いかけると男は少し怖々した表情を浮かべる。エルフは人間のように感情の起伏はあまりなく、そのため威圧的に感じるのだ。

男は気を取り直してシレアに向き直り「ごますりよろしく本題を切り出す。」

「オイシイ話があるんですがね」

「！」

「なに、ダンナなら絶対、大丈夫」

「なんだここは……」

シレアは目の前の光景に目を丸くした。

「何ってドレスの品評会場でさ」

リシャルと名乗った男がシレアたちを案内した先は、華やかな女性たちが談笑しながらドレスに着替えている部屋だった。

「！ リシャル、連れてきた？」

1人の女性が男を見つけて歩み寄る。そして隣にいたシレアを見て呆然とした。

「どうですか？」

「イイ……イイわ……よくやりました」

そう言ってリシャルに金貨1枚を手渡すと、彼は軽く手を挙げて去っていく。

「……」

シレアはそれを見送ってこれから自分はどうなるのかと身売りされた気分になる。

「あなた、名前は？」

「シレア」

「詳しい事は聞いてる？」

「いや、何1つ……」

中に促されて足を踏み入れる。女性たちは彼の容姿に感嘆とするが、着替え中の自分たちについては叫び声ひとつあげなかった。

1人や2人の男が入ってきた処で揺るがない精神力を彼女たちは身につけているのだろう。ここまで堂々していると男の方が逃げ出すかもしれない。

「実はドレスの品評会を開くのはいいのだけれど、一着だけ大きめのドレスがあつたの」

後日、寸法直しをして新たにお披露目する事も考えたがそのドレスがあまりにも素晴らしく着られる者がいるならばすぐにでも着てもらいたいと思えるものであったため、従者であるリシャルに頼み

探していたとのこと。

「つまり……このドレスを着ると」

目の前に飾られたシンプルでいてゴージャスなドレスを呆然と眺める。赤いドレスには七色のスパンコールと宝石に似せたガラスが散りばめられていた。

「あなたならきつと着こなせるわ」

そんな自信たっぷりと言われても……と当惑する。

「髪はウィッグを付けて羽根飾りをあしらひ、化粧は濃くなく薄くなくその瞳を強調させて」……」

女性は構わずに己のやりたい事を述べていく。彼女はメアリーと自己紹介した。この町の有識者の奥方で、ファッションショー関係を一手に引き受けている。

「このようなショーには一度も見た事すらないのだが……」

「大丈夫よ。前の女性が歩いている通りに歩けばいいだけだから」
そう言われて再度ドレスを見つめる。

純白のレースが体のライン沿うように螺旋状に縫いつけられ、男の私が着ていい服なのだろうか？ と金緑石の瞳を白黒させた。

「みんな！ 手伝って！」

メアリーの言葉に女性たちが一斉に群がる。

「！？」

抵抗する間もなく青年は羽交い締めになされた。

「まさか女装させられるハメになるとは……シレアも不運だな」

テーブルに腰掛けて薄紫の瞳を前方のステージに向ける。

「どんな恰好か見ものじゃな」

ケタケタと笑う。

まだ準備中の会場に2人は案内されて飲み物を味わっていた。シレアの仲間という事で特別にショーの観覧を許可されたのだ。

ユラウスは嬉しそうにしているがアレサは少し不安ではある。

エルフでさえも魅入られそうな整った顔立ちと印象的な瞳——身

長は低いとは言えないが、出来上がりは相当なものになるのではないだろうか？ 彼はシレアの容姿を正しく認識していた。

ショーの準備は着々と行われ活気がみなぎってくる。

そうして客席が賑わい、オーケストラが音楽を奏で始める。酒が振る舞われ会場の雰囲気は活気があるながらも上品さを醸し出していた。

ファッションショーを見るのは富裕層だけであるため、アルコールが入っても乱れることなく上品にショーは続けられるのだ。

「お、始まったようだ」

ユラウスが上げられた幕に気がつき舞台に目をやる。客席は静かになり、司会であろう男性がペコリと腰を折った。

「紳士淑女の皆様！ 今日この日にお集まりいただき——」

2人にはどうでもいい言葉が続き早く始まらないかと少し苛つく。長たらしい演説まがいの言葉のあとに、ようやくショーが開始された。

演奏に合わせて男女が出たり入ったりと服装などさほどこだわらない2人にはあくびの出るものだ。

「シレアはいつなのじゃ？ 奴が出たらここから抜け出したいわい」
「もうすぐでしょう」

その時——演奏が盛り上がれといわんばかりに音量を上げ観客たちは舞台上を見つめた。そこから現れた影に歓声が上がる。

大柄だが歩く姿は美しく、妖艶を身にまとったような容貌に客席からは溜息まで漏れていた。

「おおっ……？ なんとという美しさじゃ」

「……あれは、まさか」

「！ 知っておるのか？」

「ええ、まあ……」

「教えてくれんか？」

「あの目の色でピンと来ませんか？」

思わせぶりの発言にユラウスは眉間にしわを寄せる。

「なんじゃ？ わしも知っておるのか？」

舞台上を優雅に歩く女性をじつと見つめた。すると、その女性と目が合いなんとなく照れたが眉をひそめられガツクリくる。

しかしすぐ――

「……シレアか！？」

「ようやく気がつきましたか」

呆れてユラウスを見やった。

「化けたのう……」

舞台袖に去っていく後ろ姿を眺めてつぶやく。それから建物の裏手に回りシレアが出てくるのを待った。

「！ お」

ドアが開きシレアが疲れたような表情を浮かべ、少しフラつきながら歩み寄る。

「随分と疲れた様子だな」

「ああ……」

「よくやったわ！」

その後ろから女性が両手を広げて嬉しそうに近寄ってきた。

「シヨーは大成功よ！ ねえ、これから働かない？」

「ご好意は有り難いが私には行くべき場所がある」

「そう、残念ねえ……これ、報酬ね」

と小さな革袋を差し出した。

「すまない」

「また機会があつたらよろしくね」

そう言つて建物に入っていく。それを見送り革袋の中を確認した。

「どうじゃ？」

「ふむ……足りそうだ」

「それは良かった。出航の日までのんびりするとしよう」

「しかし化けたのう」

口元をニヤつかせ皮肉交じりに発すると青年はさして関心のないように視線を向けた。

「女性の温もりが欲しい時は呼べ」

「！」

言い放たれてぐうの音も出ない。とにもかくにも一同は宿に向かった。

* 航海

そうして3日の間シレアたちは町で出航の時を待った。

「良い天気じゃのう」

呑気に空を見上げて発する男を横目に2人はシャーク・スピナー号を見上げる。

「よう、来たか」

ネドガレルが手を挙げながら3人に近寄った。

「もうすぐ出航だ、乗ってくれ」

親指で船を示す。黒みがかった船体に白い帆が青い空に映えている。甲板に立つと船員たちが忙しくなく出港の準備を進めていた。

ギユネシア大陸に渡るうという放浪者たちは少なからずいるらしい。他の大陸に渡る者などアウトロー^{アウトロー}か商人くらいだ。

「よし、出航だ！」

ネドリーがそう言って右手を挙げると波止場にいた船員たちが乗り込み足早に所定の位置に付いた。

白い帆が風を受け、船はゆっくりと波止場から離れていく。

船客たちは今生の別れのように遠ざかる陸地を見つめた。生きて返る保証はない……そんな感情が彼らの表情を陰しくしていた。

「どれくらいで着くんじゃ」

「わたしに訊かれても解りません」

心地よい風を感じながら甲板で3人はくづるく。

「船員に訊けばいいだろう」

「順調にいけば約10日つてとこだな」

シレアの背後からネドリーが応えた。

「……」

船長の言葉に一同は互いに顔を見合わせる。どう考えても順調にはいかないのだと言われているようにしか思えない。

「4日目くらいの距離に無風帯トルドラムがあつてな」

「ほう」

「……」

ネドリーは関心して続きを待つシレアを一瞥し「おっと、呼ばれてるぜ。じゃな」と遠ざかった。

「？」

誰か呼んでいただろうか？ と首をかしげ、さして気にする風でもなく空を見上げる。

大気を読み自然の声を聞く——レンジャーとしての能力も高い彼はこうして空を仰ぎ大まかな空気を読む。

敵の匂いをかぎつける能力はエルフには敵わないにしても充分、渡り合えるほどだ。

「……追つてきている」

きな臭い意識が船の遙か後方から感じられる。

相手の動きがどうも妙だ。先を読んでいるにしてはこちらの後を追ってくる。考えられる事といえば……

「確信が無いが、まだそこまでの力が無いのか」

口の中でつぶやく。

いくらユラウスのように先が見えたからといって、1人の人間に何が出来るのかと考えているのかもしれない。

シレア自身、己に何かを変える力など持ち合わせているとは到底、思えない。ユラウスでさえ久しく見なかった『先読み』に疑っていることだろう。

先読みの中には重要なものとは呼べないものも含まれることがあると言っていた。その能力は確実なものではないという事だ。

相手の力がどれほどのものか見当も付かないが直接、叩けない理由があるのかもしれない。

「ふむ……」

考えるのは好きだが考え過ぎるのは好きじゃない。遠くの波間を見やり船室に降りた。

昼近く――配られた食べ物を受け取るシレアとアレサの目には床に転がっているユラウスの姿が切なげに映し出されている。

「う……うっ……」

「なるほど、それで海路を避けたかった訳ですな」

「こればかりは長生きしていてもどうしようなし」

2人はしれつと昼飯を口に運ぶ。

「わしの前で食べ物なんぞ口にするな」

「甲板で風に当たると良い」

「うっ……何も無いのに吐き気が止まらん」

シレアの提案にずるずると這いずりながら甲板に向かうその背中に苦笑いを浮かべた。ああなつては、かつて『古の賢者』と呼ばれた種族も情けなく見えてくる。

アレサはレーズンパンと野菜スープを交互に食べ進めながら船室を見回す。彼にとっては外の全てが新鮮なのだろう。

川面に浮かぶ船は知っていても大海を駆ける船は初めて見るのだ。

「海の香りというものは独特なのだな」

「！ ああ」

感情の起伏はシレア以上に薄い。おそらく彼の中では戸惑いや驚きが満ちているに違いない。

*ドルドラム

航海は何事もなく3日目が過ぎようとしていた——あれだけ船酔いに悩まされたユラウスも慣れて来たようで、今では船室で食事を取れるまでになっている。

「！」

昼食を終えた頃、シレアがふと気がつく。

「船が止まった……？」

「！なに？」

「……確かに止まったようだ」

船長が言っていた無風帯ドルドラムに入ったのだろうか。甲板に出てみると船員だけでなく他の船客も空を見上げていた。

「ネドリー」

「おお、ドルドラムだ」

呼んだシレアに応じて肩をすくませる。

「本当に無風なのじゃな」

「こうなっちゃお手上げさ。潮の流れを利用して少しずつ進むしかない」

腰に手を当てて深い溜息を吐き出した。

「……」

船長の言葉を聞き金緑石の瞳を海と空に向けて少し考える。

「ネドリー」

「あん？」

「面白い提案がある」

「！言ってくれ」

無風状態のまま船は相変わらず動かず数人の船客が集められた。

「魔法を使える者はこれだけか」

目の前にいる男たちを一瞥していく。

ローブに身を包んでいる老齢の男性や、ユラウスのように流した衣装を身につけている者と様々だが皆が持つ杖が彼らをウィザードだと言わしめていた。

「この中で召喚魔法の出来る者はいるか」

10人いるうちの5人が手を挙げる。

「何をするつもりなんじゃ」

もちろん手を挙げたユラウスが問いかけた。

「エアエレメンタルを召喚してほしい」

「なるほど……風が無いなら造り出せばいい訳か」

それに一同はざわつくが、アレサは感心して発する。

「おお！ さすがシレアじゃな」

「実際に出来るかどうかは解らん」

「とにかく、やってみよう」

エルフの言葉にウィザードたちが一様に頷く。

そうして彼の提案が実行された。

ユラウスは船首にアレサは船尾そしてシレアは船の中ほどに位置し、前に3人中ほどと後ろに1人ずつウィザードが配置に就く。

何かの合図も無くおもむろに詠唱が開始された。

静かな船上に重々しくも凜とした言葉のつらなりがまるで輪唱のように響き渡っていく……静かな始まりと同じく静かな終わりで詠唱が止んだとき、渦を巻いた存在が幾つも現れた。

「！？ こいつはっ……！？」

人の背丈よりも大きな強いつむじ風を思わせる塊が8つ、消えることもなくそこに留まっていた。

「エアエレメンタルじゃよ」

驚くネドリーに応える。

「これが……初めて見るぜ」

足は無いが、人のような形にも見えるつむじ風は召喚者の命令を待つようにそこにじっと佇んでいた。

*甘い口づけ

「指示を頼む。ネドリーは舵^{かじ}を」

「おおっと、そうだったな」

シレアの言葉に彼は慌てて船首にある舵に向かう。

それを確認し青年は手を挙げた。ウィザードたちはそれを見て一斉に帆を指さす。するとエアエレメンタルたちは帆に向かった。

「！ お……？ おお？ 少しずつだが動いてるぞ」

舵を手に口の端を吊り上げる。

「ふむ……」

その様子を見ながらエアエレメンタルに指示をして船を進めていく。このまま続ける事は難しいと判断していた。

何故なら、魔法を維持し続ける事は精神力を消耗していく……試みただけでこれを持続させる事までは考えていないのだ。

魔法を使える者が多ければ交代しながら行えるが、この人数ではそれも適わない。

彼の予想通りドルドラムを抜ける前に皆が体力、精神力を共に使い果たし肩で息をしていた。

むしろここまで粘ってくれた事に驚きを隠せない。各々に礼を告げ船室で休むように声を掛けた。

「いやゝ凄かった。魔法つてのはやっぱり便利だな」

「スプーンやフォークのように使えればな」

苦言を呈するように発する。

魔法は確かに便利だが簡単に扱えている訳でもない。小さなものなら簡単と言っても構わない、しかし効果が大きければ大きいほど術者の負担は増大し時として己に返ってくる。

戦士が使いこなせない武器を扱うのと同じで行きすぎた力は身を滅ぼすのだ。

「無風帯はあとどれくらいだ」

傾きかけたオレンジ色の太陽に目を細め船長に問いかける。そんなシレアを一瞥しネドリーが口を開く。

「まだまだ続くぜ」

そのひと言に小さく溜息を漏らした。

「打開策はある」

「！ ほう」

どうして今まで黙っていたのかと言いたい気分ではあるが、それだけの理由がありそうだ。

ネドリーは上着のポケットから乳白色に輝く真珠を取り出すと、それを未だ凧の海に放り投げた。

「これであいつらが来る」

「あいつら？」

怪訝な表情で見つめる青年に男は笑って説明を始める。

「ちよつとしたモノで褒美に船を進めてくれる種族がいるのさ」

「海の種族……」

青年は船長の言葉に海をのぞき込む。

知ってはいるがまだ会った事がない……少しの期待はするものの、船長の言葉がひっかかって素直な期待感は抱けなかった。

「お出ました」

「！」

身乗り出すと、船の下にいくつか得体の知れない生き物の頭が浮いていた。目の良い青年はその顔に眉をひそめる。

それは美しい女性の面持ち——色とりどりの貝殻の髪飾りが彼女たちの艶やかさを嫌味なく表していた。

「……マーマンか」

「マーメイドって言えよ。相手は女性だぞ」

海を統べる種族——人魚はさほど強い種族では無いが、人間と同じように武器を持ち魔法を操る。

戦士は主に男の人魚、ウィザードは女の人魚が多い。

「彼女たちに頼めば波を作り船を動かしてくれるってワケさ」

簡単に言っているようにも聞き取れるその笑顔に、青年は怪訝な表情を浮かべた。何か疑われている事を悟った船長は青年から視線を外し少し迷いながら発する。

「まあ……少しの報酬を払わなけりゃいかんが」

「ほう」

やっと切り出した。

「彼女たちは美しい男が好きでな。口づけを与えればその代償に大抵の事は引き受けてくれるんだ」

「……ほう」

嫌な予感が彼の脳裏を過ぎる。

「そこで……だ」

ネドリーは船のへりに肘を突き、目を泳がせながら青年に口を開いた。

「言いたいことは大体わかってるよな」

「……なるほど、素直に乗せたのはそういう理由か」

「まさか自覚が無いとか言うなよ」

もちろん無い訳ではない。周りの反応に否が応でも自覚させられる。彼はナルシストになる気なぞありはしないし、むしろ自分の容姿に興味など無い。

「いつもはどうしていたんだ」

「あーその……なんだな……」

言い出しにくそうにして諦めたように肩をすくめた。

「ジャンケンで負けた奴がな」

「なるほど」

彼女たちはとりあえず報酬としての口づけが欲しいだけのようだ。まごついていても先には進めない。

青年は小さく溜息を吐くと海へ飛込んだ。

「！」

海に飛込んできた人間に驚きながらも人魚たちはその容貌を確認

するために近づく。

「……」

囲まれた青年は表情を変えずに彼女たちの様子を静かに見守った。
1人の人魚が彼の頬に手を添える。

緑の瞳を見つめて顔を近づけた。

「おー、やっぱ大人気」

上から男が嬉しそうに発する。

「まったく……そんな理由で我々を乗せていたとはな」

エルフは呆れて溜息を吐き出した。

「シレアも不運が続くのう」

半ば楽しんでるようにユラウスが応える。

人魚に金銭など意味もなく当然、興味もない——彼女たちが望むものは人間にとってはあまり価値のないものかもしれない。

しかし美しい種族との口づけが出来ると考えるなら、それはそれで価値のあるものかもしれないが……

「羨ましいことだ」

先客の1人が様子を眺めながらぼそりとつぶやく。

「まあ、初めはそうかもしれないな」

「初め……？」

苦笑いで応えたネドリーにエルフは怪訝な表情を浮かべて聞き返す。

「オレだって男だ、初めは喜び勇んで海に飛び込んだね」

しかし、回数を重ねるにつれそれもおっくうになってくる……それにも増してキス以上のことなど何も無いのだ。

男にとってはそれは酷でしかなく、それ以上のことを想像しても下半身は魚だ。たちまちに萎えていく。

「マーメイドのウィザードは人間に変身出来ると聞いたが」

「そこまでしてくれりゃいいけど……生憎と口づけでおしまいだ」
問いかけたアレサに肩をすくめる。

「お。終わったようだ。上げてやれー」

海面で手を振る青年に手で応え、船員たちに指示を下した。

「ご苦労さん」

「言ってくれる」

軽く言い放たれ、海水でびしょ濡れの青年は呆れるようにつぶやく。

「あんたのおかげでドルドラムから抜け出せる」

船長が発した途端、船がゆっくりと動きだし甲板にいる一同は体を少しグラつかせた。風は相変わらずそよりとも吹かないが、船は何かにつけて引張られるように徐々に速度を上げていった。

「こいつは凄いのう……人魚の力というものは」

「実際は人魚が動かしてるワケじゃなねえよ。海のモンスターを使ってるらしい」

「……海のモンスター？」

「ああ、どんなモンスターなのかは知らねえけどな」
シレアたちは互いに顔を見合わせた。

＊お前の価値はいかほどか

次の朝――

「お、ドルドラムを抜けたようだぜ。お前らしっかりやれよ！」
張り上げた男の言葉に船員たちが威勢良く応える。

「やれやれ……これでギユネシアに行けるというものじゃ」

「そんなに簡単に事が運ぶのだろうか」

「……」

ぼそりとつぶやいたアメジストの瞳を青年は静かに一瞥し、海鳥の飛ぶ向こうに視線を移した。

昼近くになり、食事が配られる。

その食べものを受け取ろうとユラウスが手を伸ばした刹那――船がガクンと大きく揺れた。

「！？ なんじゃ？」

「何かがぶつかったような衝撃だ」

「では何かがぶつかったのだろう」

しれっと応えた青年を2人は凝視する。そして急ぐように甲板に駆け出した。

「一体なにがあつ……！？ なんじゃこりゃ！？」

甲板に出たユラウスは視界に入った物体に声を上げる。

それは伸縮性に富み甲板の上と言わずあちこちから船員や客たちに攻撃をしかけていた。

それはあたかも爬虫類の舌のように自在に動き、丸い何かがずらりと付いている。

「蛸……？ いや、^{イカ}烏賊か！？」

「……クラーケン」

「海の魔物！？」

3人が呆然と眺めていると、ふいに巨大な無数の足は動きを速めた。

「おい！ こいつをなんとかしてくれ！」

ネドリーが剣を持ち応戦しながら発する。

「！？」

シレアは向かってくる触手に剣を抜き刃を走らせた。粘液に覆われた柔らかい皮膚は剣の刃などものともせずその攻撃を緩めることはない。

「これはどういう事だ」

弓を手にしてアレサは船長の背後につく。

「どうやら相当シレアを気に入ったらしい」

「！」

男を一瞥し弓に矢をつがえて解き放つ。巨大な触手に穿^{うが}たれるダメージはさして感じられなかった。

「どういう意味じゃ！」

すぐに唱えられる魔法で攻撃しながら問いかけると、ネドリーは肩をすくめて口の端を吊り上げる。

「この船を沈めてあいつを連れ去る気だ」

「！？ なんじゃと？」

ユラウスは青年に目を移す。言われてみれば、確かに触手はシレアを執拗に狙っているようにも見えた。

「まったく…… あんたたちの連れはなんてえ厄介なことをしてくれるんだ」

「彼を指名した人間がよくも言う」

「悪かったよ…… まさかこんなことになるとは露ほども思わなかったぜ」

戦士たちの攻撃はもはや無駄としか言いようもなく…… おもむろに低く、くぐもった声が耳に届いた。

その方向に目をやると、青年が剣で攻撃を受け流しながら何かを唱えていた。それを目にしたユラウス他ウィザードたちが続いて発

する。

唱え終わると同時に、触手のあちらこちらから大きな爆発が起った。それにビクリと強ばりしばらく動きを止める。

しかし――

「！？ シレア！」

銀の瞳が一斉に青年に向かう触手を映し出す。

「――！」

剣で受け止めることは適わない。

シレアは覚悟を決めたが、何故か触手は彼のすぐ手前で動きを止めた。そうして触手はするすると静かに海の中に消えていき、まるで何事もなかったかのように凪いだ海の音だけが響いていた。

「……？」

「どうなつてんだ？」

そこにいた者たちはしばらくただ呆然と立ちつくし顔を見合わせる。ただ1人、シレアだけは複雑な表情を浮かべていた。

「一体なんだつたんじゃ」

船室に戻り食べ損ねていた昼食に手を伸ばし、冷めたスープと硬いパンに顔をしかめた。

「しかしクラーケンに襲われて無事でいられたのですから良しとしなくては」

「それもそうじゃな。あんな怪物これからも願ひ下げじゃ」

「！ いかがした」

何も応えない青年に怪訝な表情を浮かべる。

「なんでもない」

言つてパンを手に取り食べ始めた。

「さすがのおぬしもびりおつたか」

「……」

嬉しそうに言い放つユラウスを尻目にアレサは目を細めた。

クラーケンは明らかにシレアを捕えられたハズだ。なのにそうし

なかった……何かに怯えるように慌てて退いたかのような去り方だ。
彼は改めて青年が何者なのかを思案した。

*冷たい肌

それからさらに5日を経て、一同はようやくギユネシア大陸の端を視界に捉える。

「あれが……」

初めて見る陸地にアメジストの瞳が輝く。こんなにも胸躍る感覚が世界にあったのかと歓喜する彼の表情は相変わらず薄いが、それを知る2人は顔を見合わせて微笑んだ。

エナスケア大陸以外の大地はシレアにとっても始めてだ。否が応でも期待に胸は膨らむ。徐々に船は港に近づき、そこにあるいくつもの影が姿を現すとエルフの表情が途端に苦くなる。

「解っていたこととはいえ……」

つぶやく言葉に2人は苦笑いを浮かべた。

港町ワジャジャル——エナスケア大陸との交流を担う重要な拠点の一つだ。

船から降りると船長と船客たちは1つの建物に向かう。簡単な木造建築の建物に入ると中も簡単な造りでカウンターが置かれているだけだった。

ギユネシア大陸に入ったという記を残すための作業なのだが、ウィザードは自分で記入し仲間の戦士たちの名前もついでに記している。

「……」

アレサはまだ顔をしかめたまま受付の人物を見つめていた。

「シャ……おまえモ書け」

まじった

瞼のない目から縦長の瞳孔がエルフを見やる。その姿はまさしく

爬虫類——トカゲ——を思わせる。

彼らは『リザードマン』と呼ばれる種族だ。二足歩行のトカゲ……

……と言えれば解りやすいかもしれない。

他種族と交流する事で得られるものは多くそれによりリザードマンの社会も繁栄を続けていた。

リザードマンの表情はエルフ以上に掴みにくい。そもそもエルフのような人間と似ている種族とは考え方も概念も異なる部分が多数見受けられるのだ、同じだと思って接すると痛い目を見る事もある。とはいえ、仲良くなれる人種である事は間違いない。そうして3人は記入し建物をあとにした。

街並みは人間の港町とあまり変わらないが歩いている人物たちに多少の違和感を覚える。この大陸ではむしろアレサたちの姿の方が珍しく、道行く人々（リザードマン）が時折3人を一瞥していた。

「目的地を決めようではないか」

ユラウスたちはギュネシア大陸の地図を購入し食堂で話し合う。

「ここからとりあえずは北に向かう訳ですね」

大陸の最も南に位置しているワジャジャルの右隣にはメンデラウスとの中継港になっている町シユシユリケルがある。

ある程度、大きな街や村なら地図にも記されているが小さな集落は地図によってまちまちだ。結局は歩かなければ解らないといった処である。

アウトロー

放浪者たちが宛てもなく歩き地図は埋められてゆく。

「ああ、まず北に向かう。そこから先はまた後^{のち}に決めよう」

青年が頷いて会議は締められる。

そして、ドン！ と彼らの前に置かれた大皿にはあまり見たことのない料理が乗せられていた。

「……」

少しきつめの香草が使われているらしく、独特の香りにアレサは眉をひそめる。戸惑っていると、2人はさして気にする風でもなく料理に手を伸ばしていた。

「あななたちは平気なのか」

「わしは500年前にも食べておる」

「エナスケアでも郷土料理として食べられている地域が存在する料理だよ」

「……」

それならば食べられるか……と遠慮気味にフォークを立てる。鼻を近づけるとミントが使われていることが解り顔をしかめた。

勇気を出してひと口含みゆつくりと噛んでいく。

「！」

意外に美味しいと感じた。ミントが強いと思ったが少しクセのある肉にはむしろぴったりだ。

「多少クセの強い料理が多いが不味い訳ではないぞ」

最も老齡であるユラウスが得意げに発する。500年も前の舌の記憶など信じられる2人ではないが、とりあえず笑っておくことにした。

物品はエナスケアよりも少々、高めだったが一通りの保存食を揃えて船に乗せてきた馬に乗り一同は北に進路を取る。

ごつごつとした灰色の岩が多く見られる大地とやや肌寒さを感じる大気は、確かにここは別の大陸なのだと実感させた。

「……」

切り立った山々の連なりに薄紫の目を細め、2人の背中を追いかける。

＊その行く先に何を見る

青年はこの大地の気を読み取るべく周囲の気配を静かに探っていた。レンジャーとしてまずやるべきことは自分の立つフィールドを細部まで理解することだ。

エルフには生まれ持った本能として敵や自然の気配を探る能力が備わっているが、人間はそうはいかない。

それでも人間としてシレアの才能は高かった。

澄んだ青空にどこか刺すような空気が肌に伝わる。

馬を進めていた3人の上空に何か大きな影が過ぎった――

「!？」

何か大きな鳥が翼を羽ばたかせたような音が耳に響くと、2人の馬がいなくてその脚を止めた。その2人に合わせて青年もカルクカンを抑める。

馬の動きに驚く間もなく視界に白く輝く影が映り、それは目の前に舞い降りた。

「――!」

その体はシレアたちよりも高く大きく、体を覆う乳白色の鱗は天高く昇る陽の光を受けて輝いている。

彼らの頭などひと呑みにしてしまいそうな口には整列した牙と奥から覗く赤い舌がうごめいていた。

黄金色の瞳はユラウスたちを睨みつけるように見下ろし、その背にあるコウモリに似た翼は綺麗に折りたたまれて落ち着きを表している。

その姿は紛れもなく――

「……っドラゴン」

銀の瞳が驚きに満ち目の前の生物に正しくその正体を応えた。

「ほう、これはまた珍しい一行だ」

少しこもった男の声で3人に言い放つ。

「オスか」

「そこに反応するのかおぬしは……」

さらりと発したシレアに呆れた。

「これは……智の竜か」

エルフの言葉に、人よりも数倍ほど大きなドラゴンは感心するように目を細める。人語を話し知識に長け魔法を操る彼らのほとんどが人間には友好的もしくは中立の立場に存在している。

ドラゴンと呼ばれる種族は多種多様に存在する——翼の無いもの、知能の低いもの、神に近いもの……炎を吐くものや強烈な酸や毒を吐くものなど。

智の竜と呼ばれたこのドラゴンは立派な翼を持つ「空を統べる者」だ。空を駆け風を孕む。

「汝に問う」

「！」

白いドラゴンはユラウスに鼻先を向けて突然、切り出した。

「年月とはなんぞや」

「うつ！？」

いきなり振られて頭の中が真っ白になったらしい、半笑いで固まっている。

「取り戻せないものだ」

「！」

目の前の男からではなく背後からの声に大きく首を振った。そこにいたシルヴァブロンドの人間に目を細め、次にエルフに視線を移す。

「汝に問う」

「！」

アレサは唇を微かに引き結び構えた。

「夢とはなんぞや」

「！？」

少し瞳を大きくしてしばらく沈黙が続く……彼の中では様々な言葉が渦巻いていることだろう。考えすぎてドラゴンが少し苛つき始めた。

「掴めぬ明日だ」

「！」

またしても聞こえた声に向き直る。

「掴んだ瞬間からそれは別の名を持つ」

続いた言葉に少し感心するように鼻息を吹き出し、今度はしっかりと青年を見下ろした。

「汝に問う」

輝く宝玉のような瞳を向け、静かに続ける。

「この世とはなんぞや」

この問いかけにはさすがの彼も難しいだろうと2人は体を強ばらせた。しかし青年は少しもためらうことなくその美しい金緑石の瞳をドラゴンの視線と合わせて言い切る。

「許容する腕だ^{かいな}」

「！ ほう……面白い」

感心するように発したドラゴンを見やり、カルクカンから降りた。そんな青年にゆるりと近づく様子を2人は固唾を呑んで見守る。

「久しいな」

「2年振りか」

会話を交わす1人と一匹に2人は目を丸くした。

「……どういう事じゃ」

「このドラゴンを知っているのか」

2人の反応に満足したのかドラゴンは高らかに笑い地面にへたり込んだ。

「ホッホッ……驚かせてすまん。我と彼は友なのだ」

「シレアも人が悪い」

「年寄りを驚かすでないわ」

ホッと胸をなで下ろし青年とドラゴンに歩み寄る。

「ぬしがギユネシアまで来ようとはな」

「私は放浪者だよ」
アウトロー

苦笑いで応えるとドラゴンは鼻を鳴らして返した。

「確かに、ぬしは以前に全ての大陸を渡りたいと言っておったな」
それからドラゴンはハタ……と何かに気がついて口を開いた。

「おお、自己紹介がまだであつたな。我はヴァラム。以後お見知りおきを」

人間のように胸に右手をあて丁寧に腰を折る。その様子に2人は安心して笑みをこぼした。いくらシレアの友人と言われても相手はドラゴン、その力の恐ろしさを知っていれば警戒もするというものだ。

とはいえ――2人はこのドラゴンにいささか呆れ気味だった。

食事ついでに腰を落ち着けて会話を交わしているのだが、気さくという以上に気さくで「これが本当にドラゴンなのか……」と思わせるほど。

「古の民ロデュウに会えるとは我は運がよい」

シレアの持っていた酒瓶を大きな手に持ち声高らかに笑う。夜に3人で飲もうとワジャジャルで買った酒はほとんど彼に飲まれてしまった。

「おお、そうであつた。ぬしにこれを渡したく思い探しておつたのだ」

「？」

ドラゴンは頭の角に下げていたペンダントを取り青年に差し出す。
「先日に爪が抜けてしもうての。人間はこういうものをよく飾りとして加工するであらう。我もそれに倣^{なら}ってドワーフに作らせてみたのだ」

「ほう」

応えて受け取ったペンダントを見やる。

まるで真珠を思わせる艶と輝きにツタのような彫刻がなされ金銀

があしらわれている美しいペンダントトップだ。

「私の友人は多くおるが、ぬしは中でも美しい。それを持つに足る者である」

その言葉に小さく笑いながら装飾を眺める。

ドラゴンは美しいものがとても好きで、種族の違いである美しさも理解していた。人間の容姿のみならず、彼らの持つ強い欲望にも興味を持っている。

*冬の心

「またいずこかで会おうぞ」

発して飛び立つドラゴンの影を一同は目で追う。夕暮れにさしかかる日差しを反射して輝く白き姿は少しずつ遠ざかっていった。

改めて北に向かい夜になる――

「今日はわしが火の番じゃな」

「また寝るのは勘弁してもらいたい」

「失礼な！ あれはちよつとした油断からじゃ。今日は大丈夫じゃよ」

胸を張る男に青年は小さく溜息を漏らす。

深夜――

「……」

シレアは消えかけた火に薪をくべ、寝入っているユラウスを見つめる。

「なんともものんびりした種族だ」

彼の性格なのだろうが……とつぶやき赤みがかった下弦の月を見上げた。

野宿する時は交代で火の番をするのだが、ユラウスは必ずと言っていいほど途中で寝てしまう。長年、聖なる森で暮らしていたせいでもあるのだろう。

朝になって謝る彼に青年は怒ることもなく呆れて頷くだけだった。エルフのそれと違い、彼の許容はとても広いのだと2人は感心する事が多い。エルフは表情が見て取れないし薄いというだけで感情が無い訳ではないが、シレアは人間にしてはいささか感情の起伏が薄すぎるようにも思えた。

拾われたときから彼は己の感情をあまり外には出さなかった。集落の子どもたちにからかわれたりいじめられたりもしたが、反

応の薄い彼にむしる違和感と畏怖の念を覚えいつの間にか1人でいる事もしばしばで彼を拾った長は気が気ではない日々を過ごしたものだ。

「クク……」

養父の顔を思い出し、パチパチと音を立てるたき火を見つめて喉の奥から笑みをこぼす。そしてふと険しい表情に切り替わった。まわりつく気配はゆるりと彼の体に触れてくる。

彼の何を探ろうというのだろうか……

「——」

ふいに心の奥深くに入り込まれる感覚——しかしすぐそれは離れていった。

荒い息を整えて自身の体を抱きしめる。心に入られたとき彼は抵抗しなかった……奥底に沈み込んでいる記憶をそれが引き出してくれるかもしれないと淡い期待を抱いたからだ。

しかしその影すらも彼の奥深くには入り込めず、逃げるようにかき消えた。

「……」

気を落ち着かせ宙を見つめる。

本当は過去の記憶などどうでもいいのかもしれない……記憶をたぐり寄せる試みはするものの、それが適わなかった己の心情にはさしたる落胆も絶望も少しの哀しみすらも見あたらない。

この広大な大地に立つとき、意識は遙かな遠方を目指して拡がっていく。

風がさらに遠くへ運び——訪れたことのない土地の景色までも映し出してくれるようだった。

『お前の心は凍てついた冬のようなだ』

ふと昔に投げられた仲間の言葉が浮かぶ。確かにそうだと思ったものだ。それを言われたことにすら何の感情も湧かなかったのだから。

だが、彼の奥底の優しさを知る者がいる……その心にある気高さ

を知る者がいる。彼は己が理解されることを望んでいる訳ではないのだ。

そこに在るものを尊^{たつと}び、敬意を表することが重要なのだと養父から学んだ彼にとって自身を中心に置く意識はあまりなかった。

もちろん、自分の意識が正しいとも思っていない。それぞれ人にはやるべきことがある。全て同じという訳にはいかないのが当たり前なのだから。

* 集落

朝――

「すまぬ！」

「構わん」

平謝りするユラウスに無表情で応える。

「まさか寝てしまうとは……」

悔しそうつつぶやくが、彼が寝るかもしれないことは重々解っていたのだ。青年は喉の奥から笑みをこぼし荷物をカルクカンに積んでいく。

そうして一行は北に向かう。

「！」

目の前の視界に生活を漂わせる風景が映った。

簡単な木造家屋に木彫りの人形らしきものが軒下につり下げられている。この土地、特有の風習なのだろうか。

「死者の霊を鎮めるものじゃよ」

怪訝な表情を浮かべていたアレサに顔を少し近づけて、つり下げられているものに指を差す。

小さな集落のようだ。3人が足を踏み入れるとその音を聞きつけて何人かが建物から姿を現した。その姿は当然リザードマンである。

「止まれイ！」

3人の乗る馬の前に1人のリザードマンが立ちふさがった。

「貴殿たちはいかようでココに来た」

制止するように両手を上げ、オレンジの瞳を向ける。肌は爬虫類らしく微かな凹凸を持ちその色は艶のない青みがかった緑色、ソーズワースの肌よりも濃い緑だ。

シレアは返事を待つリザードマンを見下ろし口を開く。

「旅の途中だ」

「名はなんとイウ」

訊ねられ三人は馬を降りた。

「わしはユラウス」

「わたしはマシアスの息子にしてアザレアの子、アレサ」

「シレア」

ぶつきらばうだが険けんのない物言いですらりと名乗った青年に、そのリザードマンは少々目を丸くする。

「失礼シタ。我が輩はリュオシャル。我らの守護神である偉大なドラゴン、リュオシユから名付けられタ」

自慢であるう長い尾をゆつくりと揺らし、小さく頭を下げた。

彼らの服装は人間ほど厚着でもなく、その強靱な肌ゆえの軽装であろつと窺えた。

「何もない処だがゆるりとされヨ」

発してリュオシャルは手で先を示すと、他のリザードマンが馬の手綱に手をかけ厩へと連れて行く。

その後ろ姿を見つめながら背中を追った。

「小さい集落ゆえ許されヨ」

「もてなしに感謝する」

青年が返すと一瞥し口の端を吊り上げたように感じた。

「彼は雄じゃな」

ひそひそと耳打ちする彼に青年は少し睨みを利かせる。それに肩をすくめてアレサに目を合わせた。

案内されたのは長老の家のように他の建物と違い一際ひときわ、大きく見える。

「！ 何かあるのですかな？」

「こちらの所用ダ。気になされるな」

ユラウスが問いかけると彼はそう言つてドアを叩く。彼が気づいたように、周りは少し慌ただしかった。

「客人をお連れしました」

ドアを開き中にいた人物に会釈して発する。

「うむ。入られヨ」

少ししわがれた声のリザードマンが白い髭をなでながら3人を一瞥していった。中心に暖炉が置かれ、その周りに敷かれている毛皮に一同は腰を落とす。

人間と変わらない生活のようだ。

「ほほウ……人間がこの集落に訪れるの八いつ振りか」

「ユラウス殿、アレサ殿、シレア殿です。こちらは長老のリユクシエル」

リユオシャルが丁寧に手で示しながら名を呼んでいく。それを目で追い領いた。

「よくぞ来られた」

たどたどしい人語でニコリと微笑む。おおらかな性格に見合った首飾りは色とりどりの鳥の羽と金や銀を薄くのばした楕円形をつなげて作られている。

「訊ねたい事がある」

青年は一切を包まない物言いで長老を見据えた。

「シレアと申しタか」

赤茶けた肌をさすり、ゆっくりとした口調で確認するように見つめる。

「あなたが人間を見たのはいつだろうか。の集落にいる者にも訊ねたい」

「長老ハあまり外にお出にならない。集落の者ならば最近でも放浪者^{アウト}を見ているハズだ」

「24年前はどうだろう」

「！ そのようナ前に何力あるのかナ？」

「己の何たるかを探している」

彼の言葉にピクリと反応し、その瞳を見つめる。

「……」

しばらくの沈黙が部屋を満たし長老は小さく溜息を吐き出した。

「記憶を辿ってハミタが……赤子の記憶は無いよウじゃ。30年ほ

ど前二人間の錬金術師が訪れたくらい力のう」

「！ 錬金術師か……」

青年は無表情ながらも溜息を吐いて多少の残念さを見せる。

「今宵は楽しんでいられるが良い」

「かたじけない」

ユラウスが深々と頭を下げると、料理が運ばれてきた。刺激的な味だが不味いという訳でもなく、長老たちと語らいながら食事を堪能する。

*とある青年

夜も更けて、シレアたちは虫の声を聞きながら宿に向かう。

「……」

視界に入るのは警戒している警備のリザードマン。感情のうかがい知れない顔立ちだが、その緊張感が肌に伝わってくる。

「何に警戒しているのだろうか」

アレサがぼそりとつぶやいた。

「ヤオーツェ！ こんな時間にドコに行く！」

ふいに張り上げる声が聞こえてそちらを振り向くと、腰の引けたリザードマンに警備の1人が歩み寄っていた。

「家二人っている」

「で、でも……」

比較的、人語が堪能そうな——声色からして青年だろうか——人物がそわそわとして落ち着きがない。

「！」

仕方なく家に帰ろうとした彼の前に3人が立った。

「確かヤオーツェと言ったかの？」

「……っ」

優しく発したユラウスに体を強ばらせ、一同を見上げて声を詰まらせた。

「まだ子どものようだが」

「子どもじゃない！ オイラはもう18だぞ！」

「失礼した。彼らから見れば私も子どもと大差ない」

シレアは笑みを浮かべてアレサの言葉に謝罪の念を込める。それに安心したのか、ヤオーツェは緊張を解くように肩を落とした。

「なんでもないよ」

つぶやくように発して遠ざかる彼の背中を見送る。

「い力がなされタ」

「！」

振り返ると、おそらく声からしてリュオシャルであろうリザードマンが立っていた。

「随分と警戒しているようだが」

問いかけるシレアにオレンジの瞳を向ける。少しピリリとした空気が流れたが、リュオシャルが諦めたように小さく溜息を吐いた。

「近頃、ガビアリアンが集落の周辺で見かけるのだ」

「！ カビアリアン……」

「対立しておるのか？」

「今は休戦協定を結んでゐる。しかし、いつそれが破られないとも限らないのだ」

リュオシャルは目を細める。

その昔――リザードマンと敵対関係にあつた種族がある。もちろん遙か過去には人間とも対立していた訳だが、数十年前まで対立を繰り返していた。

その容姿はガビアル……顔の細いワニといった面持ちの種族で、リザードマンよりも好戦的な性格をしており事あるごとに戦いを仕掛けられていた。

数十年前にこの地域で大干ばつが起こり、それを機に互いが休戦協定を結んで今に至るといふ訳である。

「我らはもうこのまま戦いはしたくないのだ」

「交流は無いのか」

シレアの問いかけに苦い表情を浮かべる。

「双方が必要と思われる資材や食材のみ交換している程度だ。それも役目が決まってる」

「そういえば先ほどの青年は？」

「ヤオーツエのことか……奴は5歳まで人間に育てられていたのだ」
ユラウスに応え彼の住む建物に目を向けた。

「！ ほっ……」

「そのせいで我らの言語を理解できず爪弾きつまはじにされる事もしばしば

でナ」

仲間を思い遣る感情が彼の声から見て取れる。1人でいる事が多く、長老も心配しているのだとか。

「いじめられたりはしておらぬのか？」

「そこまではない。そうとなれば我が輩が全力で阻止する」

胸を張って発した彼に一同はたくましさを感じて寢床に向かった。

*生むのは争い

朝——清々しい空の下でリザードマンたちが慌ただしく動いていた。ユラウスたちはようやく見分けがついてきたリュオシャルに歩み寄る。

「いかなされた？」

「ヤオーツエがイナイ」

「！ 心当たりは」

シレアの問いかけに首を振り、小さく溜息を吐いた。

「ヤオーツエはいつも1人でのダ」

「我々も探してみよう」

「すまなイ」

アレサに頭を下げ、遠ざかる。3人は互いに頷き散った。

「……」

シレアは集落から少し離れた雑木林に目を向ける。集落の者は普段あの林には近づかないそうだが……

ゆつくりと林に足を踏み入れる。

それほど密集していない木々の間を抜けていく。木漏れ陽が地面を照らし葉を飾る朝露が輝いていた。

「！」

微かに話し声が耳に届きそちらに足を向ける。

2つの影を視界に捉えて身を潜めて見やると、それはリザードマンとガビアリアンだった。じっと耳を傾ける。

「何故キタ」

「だって……っオイラのせいで怪我したのに放っておけないよ！」
相手のガビアリアンの声からしてメス——女性のようだ。細い口が特徴的な種族の服装はリザードマンよりも着飾られている。

彼女の肌はゴツゴツしているがそのウロコは艶のある美しい深緑

をしており、動きには女性らしさが垣間見えた。

ヤーツエの言葉通り、ガビアリアンは足に怪我をしているようだ。布を巻いているが未だに少しずつ血は流れているように見える。

「!?」

音がして突然現れた人間に2人は剣とナイフを持って構えた。

「私だ」

「！ 確か…… 集落に来てた」

「シレアだ。彼女は？」

上品に示されてトカゲの青年はうつむく。

「…… ケジャナル」

「っ!？」

ケジャナルと紹介されたワニの女性は目の前でしゃがみ込んだ人間にビクリと体を強ばらせた。

緊張している彼女に安心しろという目線を向け巻かれている布を外していく。その傷を見て青年は少し眉をひそめた。

「何にやられた」

問いかける声に陰しさが宿っている。その傷は見覚えのあるものだった。

「バシラオ…… ダ」

やはり…… 苦い表情を浮かべ右手を傷口にかざし口の中で小さく何かを唱えると、かざしていた手が淡く光を放ち少しずつ傷がふさがっていった。

「お前八、ウィザードか」

ウィグシャフタ

「魔法戦士だ」

傷口がふさがったのを確認し立ち上がる。

「皆が探している」

「！」

「早く戻れ」

「でも……っ!」

ためらう青年を一瞥し、人間に視線を移した。

「この事は黙っていてもええなイカ」

「何故だ」

起伏のない問いかけにケジヤナルは片眉をピクリと動かし語気を荒げる。

「解ってイるだろう！ 休戦協定を結んでいるとはいえ知られればまた争いが……っ」

「互いにそう思っていたという事か」

詰まらせた彼女にすかさず投げられた言葉が2人の動きを止めた。
「ならば仲良くもなれるのではないかね？」

「人間なドに解るもの力！」

「私の前にいるのは同族ではないが」

「！」

しれつと発せられ2人は互いに見合う。

「それよりも今は……」

笑顔を崩し背後にある茂みに目を移して剣を抜いた。

「こちらをどうにかしないとな」

「フー……フー……」

赤い瞳が一同を睨み付ける。

逃がすまいと低い唸りを上げて並ぶ鋭い牙をむき出し、白い縞模様映えるブラウンの体毛を逆立たせた。

「さっきノ奴力！」

すぐさま剣を抜き立ち上がり、庇うようにヤオーツエを背中に回しキリリと構えた。シレアたちの数倍もある巨体が、あたかもそびえ立つ壁のようにゆっくりと迫り来る。

「木ノ陰に隠して」

小声でヤオーツエにあごで後ろの木に促す。

「……」

彼は少しためらったが小走りで向かった。

「でかいな」

目を細めてつぶやき、バシラオの荒ぶる吐息に異様な狂気を感じ

取る。

*大切なもの

「！」

思案している彼の背後から微かに何かを唱える声が届いた。その詠唱が終わると、体が少し軽くなったような感覚を覚えヤオーツエの能力を知る。

「彼は補助魔法を扱えるのか」

「そうダ。それで私も奴を追い払う事が出来たのだ」

その言葉の通り、目の前のバシラオは今までのものより大きく凶暴だった。本来のバシラオなら2人いれば倒せるだろう。しかしこのサイズは……

その間に補助魔法が幾重にもかけられていく。いくら補助とはいえ、ここまで連続して唱えられる者は多くはないだろう。少なくとも4つの補助魔法が2人にかけられている。

全体的な能力が著しく向上し体の回りに見えない膜のようなものが張られていて、ある程度の衝撃から身を守ってくれるだろう。

「有り難い」

つぶやいて眼前の猛獣に剣を構えた。これだけの巨体に効果のある攻撃が出来るのか解らないが……やるしかない。

「奴の気を引いてくれ」

「！ 解つタ」

ムチのようにしなやかな尾を揺らし片刃の剣を構えて爬虫類特有の声で威嚇すると、猛獣はその声と動きに反応して彼女に狙いを定めた。

すかさずシレアは口の中で何かを唱え、ゆっくりと獣の背後に回る。威力のある魔法には長い詠唱を必要とする——終わるまでこちらに気づいてくれるなよ。と、じっとその背中を見つめて口の中で唱え続けた。

「シャッ！」

「ガオオウ！」

間一髪で獣の爪を避けてその腕に刃を走らせる。硬い感触に舌打ちが漏れた。

「離れる」

「！」

男の声に獣の攻撃を避けつつ後ずさりした。

「！？」

背後にある異様な気配に気づいたとき――振り返った獣の目には大小の燃えた岩が向かってきていた。

「ギヤオオオウ！？」

メテオスワーム
「流星雨！？」

こんな短時間であの魔法が出せるなんて！ ヤオーツェはその光景に思わず声を上げる。

「脚を狙え！」

「う又っ」

「グオオオ！？」

双方から獣の脚に一線を走らせると一帯に響き渡るほどの叫びを発し、その巨体をズシンと地面に横たえた。

荒い息は徐々に力を無くし、瞳から光が消え失せていく。

「……」

抵抗する力はもう残されていないと感じたシレアは歩み寄りしやがみ込んだ。

「願わくば、この世の輪に再び訪れることを……」

額に手を添え瞳を瞼に隠す。

「シレア！」

聞き慣れた声に目を開き立ち上がった。

「うお！？ なんじゃこりゃ！？ バシラオ？ これはまた巨大な

……」

「ヤオーツェと……ガビアリアンか」

エルフは静かに2人を一瞥し発した。

「お願いだ！ このことは黙ってて。ケジャナルはとても良いヒトなんだ」

数日前――集落になかなか馴染めずにここで遊んでいたヤオーツエを彼女が見つけた事が出会いだった。

女戦士であるケジャナルは彼に刃物の扱い方を教え、彼は魔法の基礎を教え合っていたが昨日、バシラオが現れて彼女は足に怪我を負ってしまった。

集落に戻れと言う彼女に従ったが気になって戻ってきたという訳だ。

「シレア、こっちへ」

「！」

少し困ったような表情を浮かべているユラウスが小声で呼び離れた場所で口を開く。

「あの子じゃよ。運命の仲間は」

「！　そうか……」

陰りを見せた面持ちに男は小さく頷いた。

「あの子はまだ若い、我らの旅路に巻き込みたくはないのじゃろう」

「ああ……」

ユラウスはここに来るまでにアレサにもそれを話し、すでに彼の意見も同じだと確認していた。

彼にその事を告げずに去る結果がどうなるのかは解らないが、死出の旅路を強要することも出来ない。

「頼むから……」

戻ってきた2人にすがりつくような瞳を向ける。

「これは良い機会かもしれない」

「どういう意味だ」

「どちらも互いに争いを避けたいがために距離を置いているならば、歩み寄りには可能はずだ」

聞き返したガビアリアンに金緑石の瞳で見据え応えた。

「もちろんそのきっかけであるお前が先頭に立たねばならん」

「！」

「そんなことだめだ！ ケジャナルはオイラの大事なヒトなんだぞ！」

「互いに仲良くなれるかもしれぬのに、おぬしはそれでも良いと申すのか？」

老境は目を細めて発する。

「そうだな……たダ遠くから牽制しあうのも疲れた」

「！ ケジャナル……。でもっ！」

「私はおまえと堂々と会って話がしたイ」

降ろされる視線は強く、ヤオーツェは言葉を失った。自分だとして彼女と普通に付き合えたらと思わなかった訳ではない。

「長きに渡った争いが彼女1人で解決出来るとは思わぬが、何もしなければそれこそ永遠にこのままじゃ」

「ケジャナルの必要があるの……？」

「お前も解っているのだろう？」

「！？」

静かに問いかけられてビクリと体をこわばらせた。

「そうだ、解っている……いがみ合っていた種族同士が分かり合えた今がそのチャンスなのだ。」

「行こう」

「ケジャナル……」

決意を固めた瞳に促されるように彼女の背中を追う。それを見て3人も後を追った。

*遠き景色

「！」

集落で気をもんでいたリュオシャルが遠方に見慣れた影を見つけ、
てゆっくり近づいてくるいくつもの影に急いで駆け寄った。

「ヤオーツェ！？ 無事だったのだな！」

「！ リュオシャル」

笑顔で駆け寄る仲間に彼は少し驚いた表情を見せる。そんなに心配してくれていたとは思っていなかったようだ。

男は安心して周りにも視線を送る。

「！？」

その中に見慣れない人影があり、表情を陰しくさせた。腰の陰に手を添えて声を低くする。

「何故キサマがイる」

「ま、待つて！ ケジナルは敵じゃないよ」

慌てて間に入って男を制止するように両手を胸の高さまで上げた。

「私はケジナル。ガビアリアンの戦士^{ファイター}ダ」

「そのキサマが何をしに来タ」

「相手に敵意が無いことくらい解っているのだろう」

落ち着いた青年の声に、男は剣に添えていた手を下ろした。

「リュオシャル！ オイラたちは仲良くなれるんだよ。いつまでも昔のことにこだわってないで、話し合おうよ」

「ヤオーツェ……」

「オイラは人間に育てられた。嫌なやつもいたけど、育ててくれた人間はオイラを愛してくれていたんだ。みんながみんな悪いワケじゃないんだよ！」

外側にいたからこそその言葉は男の心に深く突き刺さる。ヤオーツェにとつては同じ種族である仲間が警戒する対象だったのだ。

そんな意識でとけ込めなかった己の浅はかさに奥歯を噛みしめる。

「私たちガ侵してしまった過ちは消えない……ダからこそ、これから先の糧としたイのダ。我々も変わったのダ」

すぐに信じろというのは無理な話くらい解っている。一歩ずつでも歩み寄れたらと思う……ケジャーナルは静かに発した。

「そうだな。ヒトは変われるというコトを忘れてはならない」
リュオシャルはぼそりとつぶやいた。

「それでは我々はこれにて」

「うム。旅の無事を祈る」

集落の端で一同は別れを告げる。

「シレア」

「ん？」

「あ、あの魔法すごかったよ！」

少し戸惑って口を開いたヤオーツェに青年はニコリと笑みを返した。

「……」

遠ざかっていく3人の後ろ姿をヤオーツェは見つめていた。

「行っても良イのだぞ」

「えっ!？」

ふいにかけられた言葉に振り返ると、ケジャーナルとリュオシャルが静かに見下ろしていた。

「な、なに言ってるんだよ。オイラは……」

「お前は放浪者アウトローに育てられタ。5歳までだったとはいえ、その時の記憶がお前を作り出しタ」

「……っ」

覚えているのは大きな手——いつも頭をなでてくれたゴツゴツした手だった。

ヤオーツェは別のリザードマンの集落で生まれ、そのすぐあとにオークの集団に集落が襲われたのだ。

赤子だった彼は母親が必死に隠し生き残った……次の日にそこを

通りかかったアウトローに拾われたという訳である。

「彼らと共に行きたいのデしよう。お前の感情の赴くままに行動するがいい」

「でもっオイラがいなくなったら種族同士の架け橋はっ？」

詰まりながら発した言葉にリュオシヤルが鼻で笑った。

「フン、我が輩を誰ダと思ってイる。お前が架けてくれ夕橋をむざむざ壊すものか」

「待ってイる。お前が成長して戻ってくる日を」

そう言ってリュオシヤルに向けた瞳を見て彼は少し寂しかった。

彼女の瞳はもう自分ではなく、目の前の屈強な戦士に向けられているのだと感じたからだ。

戦士同士、通じ合う処があるのかもしれない。女性が持つ庇護欲だったのだろう……しかし彼は確かに彼女に恋をしていた。

守ってくれる相手に憧れを抱くのは至極当然な事だ。

「帰ってきたら子供が出来てたりして」

「何か言っタか」

「なんでもない！　じゃあ行くよオイラ」

明るく発した彼の前に彼女が己の剣を差し出した。

「！？」

「お前が無事であるように」

その剣を受け取り彼女を見上げて喉が詰まる。こぼれそうになった涙をこらえてニツと笑った。

「馬を一頭もらっていくね！」

強ばる声を張り上げて厩舎に駆けていくその背中を2人は見つめた。

「あの子にはここは窮屈ダ」

「彼の瞳はいつも私を通り過ぎてイた」

願わくば、彼が無事であるように——2人は空を見上げて心から祈りを捧げた。

* 天空の大陸

「失敗したか……」

低く、くぐもった声が薄暗い空間に響く。

冷たい岩を削って造られた壁に違和感を覚えるほど見事な玉座に腰をかけている男の顔は、薄暗い中ではハッキリと確認する事は出来ない。

そんな男の前には、無言でひざまずく3つの人影があつた。同様に薄暗い中では性別すらも解らない。

男がカデット・ブルーの瞳を1人に向けて肘をかけたままの手を軽く振ると、その人物は頭を小さく下げて立ち上がり部屋から出て行った。

「さて、今度はどう出るか」

目を細めて喉の奥から笑みをこぼし、開かれた窓に視線を送る。深淵に浮かぶ月は全ての光を飲み込んで輝いていた——揺らめく珠が照らし出すのは、欲望かはたまた希望か……

男の絞り出す嘲笑が見えない先に吸い込まれるように消えていった。

夕暮れ時のギュネシア大陸——かすれた雲はこれから訪れる夜を告げるように色を映し出しては変化しながら流れていく。

「本当について来る気かの……」

「あたりまえだろ」

4本足のトガケにまたがるヤオーツエは鼻息荒く応えた。緑色の肌をした4本足のトカゲはスワンブドラゴンと呼ばれている。主に湿地帯に生息するドラゴンの眷属だが、知能は低く凶暴性も薄い。

人によく馴れるので、こうして乗り物としても利用出来るのだ。
「仕方がない……話すか？」

ユラウスが溜息混じりにシレアに視線を送ると、ヤオーツエは首をかしげた。何のことかと問いかけようとした時——大きな生物のはばたく音に一同は振り返る。

「！」

静かに舞い降りてきた複数の影は、ワイバーン2匹と翼のある3人の人間だった。

「リヤシユカ族？ 何故こんなところに……」

エルフは静かに驚きの声を発する。

有翼人リヤシユカ族——天空大陸ウェサシスカに住む長身の種族だ。「知識の宝庫」と呼ばれる天空に浮かぶ大陸には、あらゆる英知が集められている。

「この中にシレアと言う者はいるか」

1人のリヤシユカ族が一步、前に出て問いかけると青年は静かにカルクカンから降りた。

「！ おまえがシレアか」

青年の前に立ち、その男は周りの気配に気を配るように赤い目を少し泳がせる。肩までのダークグレーの髪が湿気を帯びているように落ち着いていた。

「俺はセルナクス。評議会の命^{めい}でおまえを連れに来た」

「！ なんじゃと？ なんだって評議会がシレアを……っ」

「俺も詳しくは聞いていない。理由は評議会で聞け」

発して後ろの連中に軽く手を挙げ合図するとワイバーンを引っ張ってきた。どうやら仲間の同行が許されているらしい。

馬をつなげる準備をしているとシレアはカルクカンを草原に離れた。

「！ 連れていけないのか」

「ああ」

セルナクスの問いかけに、そうとだけ応えたとワイバーンを見上げて体をさする。

「グルルル……」

ワイバーンは気持ちよさそうに喉を鳴らし、頭を下げて青年の胸にすり寄せた。いくら調教されているとはいえ、まるで慣れ親しんだ主人のように振る舞うワイバーンに一同は驚きの表情を見せる。

カルクカン以外の馬を革紐で固定してワイバーンの足にその先をくくりつけた。そしてその背にシレアたちがそれぞれ乗るとゆつくり舞い上がる。

リヤシユカ族も翼をははだかせて空へ——しばらくして雄大な大地が眼下に広がった。

「……」

空は近く大地は遠い、青年はその光景に目を細めた。

* 天空の城

しばらく空の旅を楽しみ、前方に何かが見えてきた。

「！」

空に浮かぶ大地——天空大陸ウエサシス力だ。

「ほ……相変わらずデカイのう」

徐々に視界全体に広がる浮遊大陸に眉をひそめる。ウエサシス力は『かなめいし要石』という浮遊石で上空に浮いている状態だ。

四方には、中央の城にある要石と共鳴を起こすモノリスが1つずつ建てられていて大陸を支えている。

おおよそひし形をしたその浮遊大陸は、雄大に風任せで空を移動していく。シレアはいくつかの監視塔を視界に捉えて近づく大地を見つめた。

中央にそびえる城と、その周囲に点在する街の家々は様々な様式で建てられている。白い壁で塗り固められた城の脇には巨大な樹がさらに天を目指すように立っていた。

雑木林と小さな森から聞こえてくる鳥の声は平穏なのだと現しているようだ。

降り立つ予定の場所には、幾人かの人影が見えた。先に有翼人が降り立ち、続いてワイバーンが地に足を付ける。

「久しいのう」

懐かしむ声で遠方に見える城に視線を向けた。

「ユラウス殿は以前、訪れたことがあやか」

無表情にアレサが訪ねると、彼は懐かしむようにあごをさする。

「うむ。かれこれ1500年ほど昔になるかの……あの時と比べるとかなり変わっておるようじゃが」

「こちらへ」

セルナクスが促した先は中央の城——ウエサシス力の中心を担う

『評議会』が集まる場所だ。

城までの通りは十数メートルに渡って大きな石畳で作られた道が赤く彩られ、様々な種族が行き交っている。とはいえ、ほとんどがリヤシユカ族とエルフである。

巨大な城の門は常に開かれている。知識を得たい者がここで学ぶのだ。

「空中に存在しているからこそ、ウェサシス力は太古から常に中立に位置してきた」

先頭を切りながら、セルナクスは誇らしげに語る。

「何が起ころうともウェサシス力は常に揺るがない」

自信に満ちた声は、踏み入れたエントランスに低く響いた。広い空間には多くの人々が行き交い、それらを照らす大きなシャンデリアと取り囲むように設置された燭台が自身のロウソクに輝きを反射する。

「2階は知識の間で多くの書物が並べられておる。3階は要石の間だったはずじゃ」

「よくご存じであられる」

バロック様式に似た見事な造りを眺めながら、セルナクスのあとに続き階段を上る。書物を読みあさる多くの影を遠巻きに見つめてさらに上へ――

豪華な扉がゆっくりと抵抗無く開いていくと、薄暗い部屋にたどり着く。その中心にはしずく型の巨石が淡く青白い光を発して浮遊していた。

「要石じゃ」

その不思議な光に誰もが声を失う。部屋に微かに伝わる脈動は心を落ち着かせるような響きだった。

それを横目に上を目指す。

扉を開くと広い通路が一同を迎えた。赤い絨毯じゅうたんの敷かれた通路を進むと、大きな扉の前に立つ。

「粗相の無きように」

セルナクスは神妙な面持ちで発して、赤と青で彩られた金箔の扉を重々しく開いた。

「ワオ！ すごい」

リザードマンの青年が口笛を鳴らすとセルナクスは睨みを利かせ、黙らせる。

この階の全てを使用した部屋はかなりの広さを持ち、壁一面に設置されている本棚には所狭しと書物が収められていた。

「随分と豪華な部屋だ」

無表情に口を開いたエルフに応える。

「評議会の会議室としても使用される場所だ」

ウェサシス力の全てを担う機関『評議会』—— 齢を重ねたリヤシユカ族、数十人からなり最終的な決定権は評議長である現在はレイノムス評議長だ。

部屋の中央には五角形に設置されたテーブルと上座には一際、豪華な椅子が置かれていて、1人のリヤシユカ族が腰掛けていた。

50代ほどの男性の背中には折りたたまれた立派なブラウンの翼があり、その両脇には護衛だろうか武器を携えたリヤシユカ族が2人立っている。

「！」

近づいてくるシレアたちを見やると、ゆっくりと立ち上がり小さく会釈した。

「ご足労かけてすまない」

「いや」

それだけ発した青年を席に促して話を切り出す。

「実は、魔導師たちの先詠みで貴殿が危険な人物だと出ましてな」
その言葉にユラウスたちが驚く。

「シレアが？ どういった内容が出たのですか」

エルフの問いかけにレイノムスは溜息混じりに首を振った。

「内容は明確に記されなかったそうだ。しかし先詠みが出た以上、

調べない訳にはいかぬ」

魔導師とは、ウエサシスカの魔導的部分を支えている種族だ。北の大陸に住み、魔法力に長けた者のみがウエサシスカに招かれる。

外見はエルフと酷似しているが、背丈は低く浅黒い肌をしている。遠い昔に極寒の地に移り住んだエルフの末裔だとも伝えられている。さして関心も無いように反応を示さない本人を見つめて少し戸惑いの色を見せたレイノムスだったが、話を続ける。

「貴殿を調べさせてもらいたい」

「構わんよ」

やはり落ち着いた口調で応えられ眉をひそめた。ひとまずの確認に立ち上がりセルナクスに視線を移す。

「彼らに部屋を」

「解りました」

「順番が逆になったが、ようこそウエサシスカへ」

再び立ち上がったレイノムスは両手を広げて歓迎した。

* 銀の髪的青年

「やはりウエサシス力を避けては通れなんだか」

部屋に案内される道すがら唸りを上げる。

空が近くにある大地は、雲が上下左右を取り囲んでいる不思議な光景だ。これだけ巨大な地に足がついているのに妙にふわふわとしている。

「シレア殿も予想していたのか」

「魔導師の話は聞いていたのですね」

「しかし、さすがに敵もここまででは攻撃できまい」

あごをさすり不適に笑う。それまで無言でいたトガケの青年はミステイローズの瞳を向けた。

「さつきからなんの話してるんだい？ 敵ってなんなのさ」

それに一同は顔を見合わせる。そういえば彼には話していなかったと薄笑いを浮かべた。

「その話はあとじゃ」

なんとかこの場を誤魔化してなだめる。

「ええええー！？ なんだってえ！？」

それぞれに部屋をあてがわれたあと、シレアの部屋に集まりヤオ―ツエはようやく事実を知らされた。

「なんでそれ言ってくれなかったんだよ！」

「すまんの……話す機会を逸していたのじゃ」

ベッドに腰を落として照れたような笑みをこぼすユラウスを睨み付ける。

「じいちゃんヒドイよ！」

皮肉混じりに発した言葉だったが、彼はそれがなんだかくすぐったくて口の端をやや上げた。

「じいちゃんか……」

口の中でつぶやく。

「もしオイラがあそこから出てなかったらどうなったの？」

「それは解らぬ。アレサと同じことをしたかは謎じゃ」

「とにかく、どう調べるのかは気になる処です」

溜息混じりにエルフが発すると、青年はドアに向かった。

「！ もう話は終わりかの」

「ああ」

それだけ返して出て行く。残された3人はしばらく呆然とした。

「自分のコトなのに……」

「あれがあやつの良い処かの」

「ですね」

苦笑いで応える2人にトカゲの青年は首をかしげた。

外に出ると心地よい鳥の鳴き声と暖かな日射しが青年の目と耳をくすぐる。

「お、人間」

「！」

背後からの声に振り返ると、銀色の髪の有翼人が立っていた。人間などさして珍しくもないとは思うのだが、この場所にいる事に珍しさを感じているのだろうか？

確かに、目にする種族はどれも人間ではなさそうだ。水色の瞳が少しの好奇心を示して近づく。

身長差は頭一つ分くらいはあるだろうか、鷹を思わせる翼にブラウンの斑点が白地に映えていた。

「……男、だよな？」

「そうだ」

「なんかやらかした？」

その言葉に彼はなんとなく理解した。客間であるのは見て解つてはいたが、この一角だけ疎外感や閉塞感が感じ取れる閉鎖的な空間だ。

人間は人間の法で裁かれる事が多いが、その他の種族は人間ほどの数はいないためかルールというものが曖昧で円滑に裁ける者は多くはない。

そのため、審査する機関もウエサシス力には設けられている。

「私もよくは解らん」

そう応えた青年を不思議そうに見下ろした。

「オレ、マノサクス」

「シレアだ」

「あんた、辺境に住んでる？」

おかしな事を訊く……そう思いつつ応える。

「エナスケアの西にある集落で育った」

「で、今は旅をしていると」

先ほどから図々しくも会話を続ける有翼人に眉をひそめた。

「何が言いたい」

「オレ魔導師に友達がいてさ。そいつが変なコト言うんだ」

それを聞いてピクリと視線を動かす。

「ここに来た人間の運命と強く結ばれるって」

「！」

ユラウスよりも早く仲間を特定していた者がいたとは驚きだ。しかし、それを信じる事も出来ない。

「その魔導師に会わせてもらえないか」

「あゝ無理」

即答にさすがの青年も少し目を丸くした。それに気付いて応える。

「それだけ行つて死んじゃったの」

「！？」

「ずっと前から病氣しててさ」

まだ若い魔導師だったが元々、彼は病弱だった。北の厳しい大地で暮らしていれば、今まで生きていたか知れないだろう。

大きな体をすくめて溜息を吐いた。その悲しみが見て取れて、しばらく見つめると空を仰ぐ。

「その者はお前と出会えて幸せだったのだろう」

「！　そうかな……　そうだったらいいな」

嬉しそうに微笑む表情は少年のようで彼も笑顔を返した。年の頃は同じくらいだと思われるのだが、落ち着いたシレアとは違い子供っぽくも感じられる。

そもそも彼が落ち着きすぎているという点も否めない。

「そいつがさ、その運命の人間と会って旅をしろって言ったんだ」

「従うつもりなのか」

「まだ解らない。だから会って決めようと思って」

大きな翼を小さくはばたかせ、シレアを見下ろした。

*現す敵

「ウエサシスカが動き始めたか」

暗い石造りの空間に男の声が広がる。

「いかがいたしましょう」

黒い影の前にひざまづく女が問いかけた。

カデット・ブルーの瞳を細くして目の前の女を見やると薄く笑んだ。形の良い人差し指を軽く立て、低い声を響かせる。

「空の魔物を差し向けてみようじゃないか」

まるで子どもの遊びに似た物言いに女は小さく頷き、立ち上がったどこかに消えていった。耳に残る足音に男は喉の奥から笑みをこぼす。

ウエサシスカ——部屋には翼が邪魔で入らないため、広場にユラウスたちを呼びマノサクスを紹介した。

「まさか、わしより早く先読みした者がおったとは……」

「あんたが古の民？　すげえ、初めて見た」

自分の置かれている状況を把握していないのか、有翼の青年は嬉しそうに一同を見回す。確かに、珍しい取り合わせの一行かもしれないが「もう少し真剣に考えた方がいいのではないのか？」とエルフは無表情に思っていた。

「あんたがここに呼ばれた意味は解ったけどさ、それ正直に話す気は無いんだろ？」

問いかけられたシレアは少し肩から息を吐き出して応える。

「言った処で信じてはもらえまい。こちらは相手の存在をまだ確認してはいないのだ」

ユラウスの言葉に一同は小さく唸りを上げて思索した。

「でもさ、調べるってどう調べるんだろう？」

ヤオーツェの疑問に一同は顔を見合わせる。

「やはり魔導師たちの手を借りると思うが」

「うつむ……」

応えたエルフにユラウスは腕を組んで小さく唸りを上げた。

「考えた処でなるようにしかならん」

すっぱりと言い放ったシレアに唖然としたが、そう言われてしまえばどうしようもない。仕方なくユラウスが別の話題を振った。

「奴らは仕掛けてくるだろうか？」

「まさか空までは追って来られないでしょう」

「的が誰か解らないんだろ？ オイラ怖いなあ」

「何か来れば魔導師たちが監視してる奴らが気がつくよ」

マノサクスが応え納得したように彼らも頷く。

しかし、シレアだけは無表情だった。敵は確実にその力を付けて来ている……狙われている本人だからこそ、感じ取っているのかもしれない。

次の朝――再び評議会に呼び出されたのは小さな広場。

レイノムスと護衛、それに暗いローブを来た人物が数名シレアの前に立っている。魔導師と呼ばれる者たちだろう。

それをやや遠巻きにセルナクスとマクノサクスが眺めていた。

「なんだ、興味があるのか」とセルナクス。

「まあね」

この2人は幼少からの友人で、共に剣の腕を競った仲だ。セルナクスは評議会の近衛隊長として任に就いたが、マノサクスはその流れには乗らなかった。

戦士ならば誰でも評議会の兵士になる事に憧れる。彼の腕前からしても評議長、直属の近衛になってもおかしくはないのに兵士にならなかった幼なじみの決断には少し疑問だった。

1人の魔導師がシレアの前に立ち、その瞳を見上げる。しばらく言葉はなかったが、おもむろに魔導師が口を開く。

「あなた、自分のコトをどこまで知っているの」

「何も」

微笑んで返された言葉に、女性と思われる魔導師は無表情に目を伏せた。

次に顔を上げたとき――

「!？」

「なんじゃ？」

辺りに響く角笛の音は、何かの異変を示していた。セルナクスとマクサクスはその音の鳴らされる間隔を確認する。

「襲撃だ！」

2人は剣を抜き、評議長を守るように近衛たちと囲む。

一同の視界に入った無数の小さな影は、徐々にその姿を現す。コウモリに似た翼をはばたかせた醜い容姿のモンスター……ガーゴイルだ。

洞窟や古い城などにいて、石像になりすまし近づいてきた獲物を捕らえる。そのせいか肌の色や質感は硬く、無機質に感じられる。

つまり、剣の刃は通らない。打撃で倒すしかない。

「なんて厄介な！」

アレサは舌打ちした。ガーゴイルには通常の弓矢はほとんど通用しない。

「何匹いるんだよう〜！」

仲間に補助魔法をかけながらヤオーツェが叫び、ユラウスとシレアは攻撃魔法を駆使して落としていく。

「どういうことだ!？」

レイノムスは突然の襲撃に目を丸くして自らも剣を握った。数十匹というガーゴイルの群れは執拗に評議長に向かっていく。

「……」

シレアは怪訝な表情を浮かべて何かを探るように動きを止めた。

「この気は……?」

混在する気の流れの中に一つだけ他とは一線を画す気の流れを感じ取る。その方向に脚を進めると、そこには女がいた。

「！」

現れたシレアに驚いたのか、女の騎乗生物が反応する。

羽毛の生えた2mほどのドラゴンとでも言うのだろうか——飛竜はその赤や青の鮮やかな体の背に、鋭い目の女を乗せていた。

革の鎧を身につけ、長い赤毛を後ろで一つに束ねている。その瞳はダークスレートブルー（暗い紫）に輝き、まるで見下すようにシレアを見下ろしている。

「あのガーゴイルはお前の仕業か」

「だったらどうする」

青年は女の言葉と同時に剣を構えて素早く駆け寄った。それを察していた女は飛竜の手綱をクイと引き、威嚇する。

「シャッ！」

容易に近づけず眉をひそめた。そして口の中で詠唱を始める。

「チッ」

女はそれに気付いて飛竜の腹を蹴って促すと、翼をはばたかせて空に浮かんだ。シレアをひと睨みして遠ざかっていく。

空に指笛のような音が響いたかと思うと、ガーゴイルたちが一斉に飛び去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4810u/>

穢れなき獣の涙

2011年12月2日17時01分発行